

# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月  
所属 & 学年 | 文学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

西洋古典学を勉強しているので、実際にヨーロッパの文化に触れてみる。ヨーロッパでは古代ギリシア、ローマがどのように根付いているのか。また、海外に行ったことがなかったので、一度行ってみたい雰囲気を感じてみたいと思っていたので、今回の研修に参加しました。

想像以上にヨーロッパでは、ギリシア、ローマの文化がみられる。各地に建築が存在する。特にランスでは、戦後の復興の際に多くの建築家がデザインした建物の中に古代ギリシア、ローマの建築様式が使われているものも多く見られた。美術館を訪れるとランスではアポロン、バーゼルではディオメデスといった神話が描かれていた。また、フィールドワークの時間では、できるだけいろいろな都市に行こうとしました。

tzv のチケットを取るにしてもドイツ語が読めなかったり、日本みたいにコンビニがなく、チケットを印刷したくてもどうすればよいか、最初はわからなかった。しかし、インターネットで調べたり、寮のスタッフさんに助けをもらい、フィールドワークの時間だけでシュツットガルト、ハイデルベルク、バーゼルに行くことができた。

今回の研修において、最も大きかったのは自分の英語の拙さを実感させられたことです。特にランス大での歓迎パーティー、話したいのに、伝えたいことがあるのに伝えられないもどかしさ。この研修の前までは、英語を避けて生きて行けばいいと思っていたけれど、世界中の人々とコミュニケーションを取りたい、英語を話せるようになりたいと真剣に考えるようになりました。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

留学はお金も時間もかかり、まわりの人の協力がなければできないことです。しかし、もしあなたが行ける状況ならば、絶対に行った方がいいとわたしは思います。日本ではない異国の地での体験は確実に私たちの人生において貴重で、これからの人生を変えてくれる素晴らしいものになると思います。外国は怖いと思っている人もいますが、全然そんなことはありません。みんな親切で困っていれば手を貸してくれます。迷っているならば是非行きましょう！やらない後悔よりやる後悔の方がずっといい！

## 3. 研修費用 (さしつかえなければおおよその金額を教えてください)

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃 & ビザ申請料	160000 円	
海外旅行保険	15000 円	

研修費（授業料・宿泊代等）	40000 円	
食費	50000 円	
交通費	30000 円	
その他（小遣い、通信費など）	50000 円	
<b>計</b>	<b>約 34</b>	<b>万円</b>

自由記述欄 \*現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓

わたしが撮った綺麗なヨーロッパの風景を載せておきます。ヨーロッパの町並みは本当に綺麗で誰でも素晴らしい写真が撮れます！



# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月  
所属&学年 | 学部 年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

- 履修を決めるときに掲げた目標
  - 自分がフランスやドイツの食べ物に魅力を感じているように、現地の人にも和菓子やその魅力を感じてもらおう！食べ物を楽しむ。
  - 留学を通じて世界を身近に感じて、広い視野を持ち世界や日本のことをより深く考えるきっかけにする。
  - 外国人と話すことの自信を持つ！
- 目標を達成したか、達成のためにどんな試みを行ったか、困難はあったか、新たな課題を得られたか
  - インタビューした2店とも外国人に対して和菓子の魅力をして欲しいと感じているお店だったので、お店の人が「魅力を感じて欲しい！」と思っている要素を取り入れるようにしました。プレゼンを聞いてくださった大学の方から詳しく感想をお聞きすることはできなかつたが、「とても綺麗で美味しそう！」というコメントをいただきました。
  - しかし、フランスやドイツの街を見ていると、全く和菓子を販売しているところがなく、実際外国人が和菓子に触れ合う機会は少ないことが課題だと感じました。洋という要素を取り入れながらもあくまでも「和菓子」といったうまくバランスのとれた和菓子が今後生まれることでより和菓子が広がっていくというように、和菓子はまだ可能性のある日本の文化だと思いました。
  - フランスとドイツで過ごし、街を歩き、現地の人やガイドさんとお話ししている間に、特にこんなもなくいつの間にか世界がグッと身近に感じられるようになりました。
  - 研修に行くまではなかなか外国人と話すことに対して自信がないために勇気が出なかつた。現地に行ってから自信がついた！とまでは言い切れないけれど、外国人ばかりの海外で必然的に英語を話す状況に置かれたことで、外国人と話すことに抵抗はなくなつたし、国を超えて話ができることの楽しさを覚えました。今後の課題としては語学力と行動力が課題です。今までは座学の英語がメインでしたが、主にスピーキングとリスニングを鍛え、英語をもっと苦なく扱えるようになりたいです。また、外国人との交流の場にもっと積極的に足を運びたいと思います。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

私は今回、短期留学に挑戦し、またこのプログラムを選んで本当に良かったと思っています。もともと大学生の間にヨーロッパに行きたい！と思っており、留学にも興味がありました。この研修プログラムの内容を見たとき、あまり海外経験がない自分にとって「短期」で「事前講義があ

る」というのは魅力的でした。また、どうせいくなら何か身のあること、沢山の学びを得て帰りたい！という思いがあったため、研修という形であることにも惹かれ、またプログラムを探していた当時はあまり語学研修には興味がなかったので、「文化研修」というところも良いと思いました。実際、大学受験の際に学んだ世界史の内容に関連したものを自分の目で見て回れたのでとても良い経験になりました。また、引率者の先生がいらっしゃることに安全性や学びを高められました。

留学に興味があるのだったら、まずは飛び込んでみることにしたいと思います。私には自信はなかったけど、自信がないからといって挑戦しないのはもったいないな、と今回たくさん学びを得て思いました。きっと人それぞれ求めるプログラムは違うと思いますが、是非気になるものに挑戦してみるのが良いと思います。もしも私と同じような留学への興味を持っている方がいたら、この研修はオススメです。

### 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	16 円	
海外旅行保険	2 万円	パンフレットのお勧めのものにしました
研修費（授業料・宿泊代等）	3 万円	
食費	3 万円	あまり定かではありません。
交通費	3 万円	複数で乗ると割引になるチケットをよく利用しました
その他（小遣い、通信費など）	1 万円	
<b>計</b>	<b>28 万円</b>	

自由記述欄 \* 現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。



↑ランス大聖堂。  
初めて見た大聖堂に感激



↑ランス名産のお菓子屋さん。  
お土産としても好評でした





↑フランスの各地にある PAUL のサーモンとほうれん草のキッシュがおすすめ

↓アルザス料理のベッコフ。私の親は写真を見て「肉じゃが？」と言ったが、ワインで煮込んでいるため味は決して肉じゃがではない。



↑キッシュと共にフランスで食べるのが目標であったそば粉のクレープ、ガレットも達成。



←ドイツの隠れオススメはヨーグルト。安くて濃厚で寮も日本より多くて太っ腹。毎朝食べました。



# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月  
所属 & 学年 | 理学部 1年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

私が留学に興味を持ったきっかけは、ある友達の留学前後における変化に驚かされたことであった。おとなしいタイプだった彼女が自ら積極的に行動している姿を見て、留学先での経験や留学を通して考えたり、感じたりしたことは人を大きく成長させることを学んだ。この研修の前後には授業が用意されており、自分の成長を客観的に感じられることや自分自身が1年間学習した言語圏であることなどに魅力を感じ、この研修を履修することに決めた。

この研修を履修することに決めた際に掲げた目標は、大きく分けて2つある。1つめは、「積極的に行動すること」である。現地では、元々決まっていた授業以外の講義は受けることはできなかったので少し残念だったが、現地の講師の方が話して下さることを聞き取ろうと必死に耳を傾けたり、提示された資料の理解に努めたりしたことは良い経験になった。小学校高学年から英語を学習しているが、やはり日常生活であまり使うことのない英語を長時間聞き、理解しようとするは大変であった。しかし、この経験のおかげでリスニング力が大分身につけられたと思う。また、留学生 Welcome Party や Susanne 先生によるワークショップに参加して学んだことがある。それは、「相手は自分が伝えようとしていることを聞こうとしてくれる」ということである。どれだけ拙い英語だとしても、頑張っ て伝えようとするれば相手は必死にこちらの言おうとしていることを理解しようとしてくれていた。このことから、完璧な英語でなくても伝えようとする姿勢があれば、相手は受け入れようとしてくれるのだということを知った。しかし、ここで問題になったことがある。自分の伝えたいことが英語として出てこないのだ。自分自身の思考回路の問題だと思うが、自分の考えをぱっと英語で言うことのできる力は大切だと感じた。また、相手の話を聞こうとする姿勢をきちんとこちらが見せることも重要だと感じた。さらに英語に関して、アメリカ人が話す綺麗な英語だけでなく、フランス人やドイツ人が話す英語などネイティブ以外の英語に触れる機会も増やさなければならぬと思った。

2つめの目標は、「健康管理に気をつけること」である。私にとっては、初めての海外であったので時差の発生や環境の変化など不安なことはたくさんあった。現地について 2.3 日経ってから時差ぼけが発生したり、ホテルにティッシュが全くなかったり、初めてのことで新鮮であった。研修のはじめの方は、始まったばかりで気分が高揚し、日本のことを考えることはあまりなかったが、フランスからドイツに移動してから急に日本が恋しくなった時は、自分自身の感情にとっても驚いた。研修はとても楽しいけれど、普段の慣れ親し

んだ日本が急に懐かしくなったのである。これがいわゆるカルチャーショックというものなのかと思った。それでも、仲間がいたから最後まで研修をやりきることができた。最後の三日間は、熱を出し、仲間や先生方に迷惑をかけてしまったため、本当に申し訳なかった。先生の献身的な看護や仲間の優しい気遣いのおかげで、無事にみんなと一緒に帰国することができたが、健康管理に気をつけるという自分の目標を達成することはできなかったと思う。今回の研修は、先生方や優しい仲間がいたからやり遂げることができた。

私はこの短期の 2 週間の留学で小さいいくつかの困難を乗り越え、新たな体験をたくさんし、自分の課題を見つけることができた。以前は他人の話を聞き、その意見に同調することが多かったが、ワークショップなどを通じて、自分自身の意見を持つようになった。仲間の助けを借りて自分の感情をコントロールすることもできた。しかし、私には英語はもちろん日本語でも自分の考えや思いを正確に伝えるということに関しての力がまだ十分に備わっていない。今回の研修で身につけた積極性を発揮して、さまざまな人と関わり合い、自分の思いを伝え、相手の意見を理解し、良い関係性を築いていきたい。幸いなことに、私は部活やバイトなど、自分の意見を伝えることのできる機会が多い。そのことに感謝しながら、今回得た課題を乗り越え、自分の可能性を広げていきたい。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

私はこの研修に参加するまで海外に行ったことがありませんでしたが、勇気を出して応募して、この研修に参加することができて本当に良かったと思います。海外は日本とは全く違います。そのことは実際に行かなくてもわかるでしょう。しかし、実際に現地に行くことで、見たもの、聞いたもの、感じたことがより心に深く刻まれ、素晴らしい体験となります。いつか行きたいと思っているなら行き先や期間などについて熟考し、できるだけ早い時期に行くことをおすすめします。皆さんにとって留学が素晴らしいものとなりますように。

## 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	16?万円	奨学金を受給することができた。
海外旅行保険	2万円	この保険に入っていたことで助かった。
研修費（授業料・宿泊代等）	6万円	
食費	1.5万円	食事は楽しもうと決めていたので我慢しなかった。
交通費	2万円	TGVは少し高めだったが、トラムは安く便利。
その他（小遣い、通信費など）	3万円	大きな買い物をしなかったので結構余った。
<b>計</b>		<b>30万円</b>

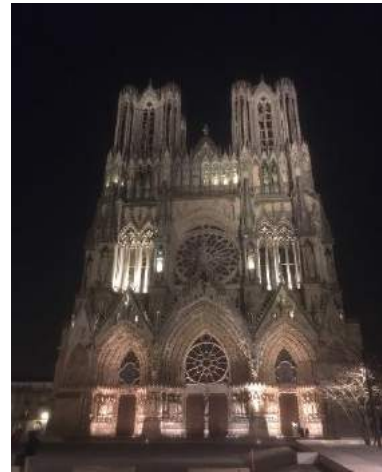
自由記述欄 \* 現地のおすすめ情報や留学エピソードなど自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓



左：ランス大学での  
Welcome Party シヤ  
ンパンを頂きました！

右：夜のカテドラル(ラン  
ス) ライトアップされ  
ていて、幻想的です。



左：アルザス地方の郷土料理「シュクルート」



右：ストラスブールで乗船した遊覧船



# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月

所属&学年 | 情報学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

名古屋大学情報学部が在学中の海外留学を積極的に推奨している、それを支援する仕組みとしてクォーター制が取り入れられていることは、受験学部決定に少なからず影響があった。1年春期が終わって、まだまだ慣れない学生生活ではあったが、とにかく一度海外へという思いに駆り立てられ、バタバタとコースを決めて手続きに入った。予想していたよりも事前の調査や発表の負担が大きく他のメンバーに比べて遅れを取る場面が多くあった。もう少しゆとりを持って臨める状況を事前に確保すべきだったことは最後まで反省点となってしまった。

留学先にヨーロッパを選んだ理由のひとつは、以前から西洋の文化や芸術に興味を持っていたことが大きい。事前研究として地元名古屋についてテーマを決め調査し発表するという課題が与えられ、名古屋で話題となっている名古屋城天守閣木造再建におけるバリアフリーの問題に取り組んだ。名古屋城の歴史や文化的価値、今回の再建の経緯や将来的な展望等を、文献を参照したり実際名古屋城を訪れて調査した結果、木造再建に当たりエレベーターの設置を回避せざるを得ない理由を自分なりに理解するに至った。名古屋城が観光地としてバリアフリーを蔑ろにしているわけではなく、本丸エリアやお土産コーナーなどにも車イスの対応が効率的に取られている。新しく再建された天守閣が訪れる全ての人にとって楽しめる観光地であり、かつ歴史的価値を持つ建造物として正当な評価を受けることを期待する。

私が今回留学で訪れたフランス、ドイツの街にも世界遺産級の大聖堂をはじめ多くの歴史的な建造物がある。ヨーロッパはバリアフリー先進国という印象があり、その取り組みを調査することを私の現地での研究課題とした。実際訪問してみて、街全体がバリアフリー化されているという認識は持てなかった。石畳の風情ある道路も、建物の重厚な扉も、車イスや杖をついた方々にはバリアとなっていた。これまでヨーロッパだから何もかも優れているというような逆の偏見を持っていたことに気づかされたことも多かった。実際ヨーロッパの地に身を置いてみて、学生の短期留学という極めて庇護された環境にあってさえ、人種的な引け目を感じなければならなかったこともあり正直ショックではあった。

自分の中にも、肌の色や国籍による優劣の意識があることは否定できない。無意識のうちに、そういう感情が態度に表れていたこともあったのかもしれない。自分自身を反省するとともに、今後の国際社会に対して提案できることはなんだろうか。やはり人と人が交流しお互いの親交を深めていくなかで、歴史文化や慣習の違いを理解し合うことしかないという答えしかない。それも出来るだけ若いうち、固定観念が固まってしまうより前にそういう機会を与えられることが望ましい。

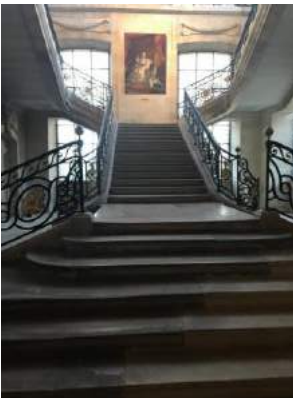
全ての若い世代がお互いの国を訪れ直接交流することが理想であることは間違いない。しかし各国の受験制度の事情や経済的負担を無視することはできない。そういった足枷を外すひとつの可能性が今や世界的に普及している SNS だと考える。言語の違いは翻訳ソフトのさらなる

進化に期待したい。学校や個人で子供たち同士が安全に望ましい交流を展開することが可能か、そのためにどのようなシステムや指導が必要かは、私がこれからさらに専門的に学ぶ情報学が担うことができる対象になるはずだ。

今回の留学を単なる観光に終わらせることなく、今後の研究の課題のひとつとして位置付け、私自身の交際交流の原点としたい。



ランスのカテドラルのミュージアムにあったエレベータ。このミュージアムはスロープもあり配慮が感じられた。カテドラルそのものにも車椅子用の入り口があるが、重厚な扉がついているので自由に入りはできない。



サン＝レミ聖堂にはバリアフリーは全く見られなかった。



ランスのカテドラルの外にある、破壊されたままの彫像。資料がないために復元が不可能なのだという。名古屋城が築城時の設計図が残っているうえ、戦前の写真も十分に残されており復元が容易だ、ということが貴重であることが分かった。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

- ・ カード支払いをメインにするなら必ず複数枚用意すること（使えないことがある）。出国当日セントレア空港でも両替は可能。カードを使用する場合は暗証番号の事前チェックを忘れずに。それでもカード支払いそのものを断られることもあるので、結局現金が安全。多めに持って行って損はないと思う。
- ・ 自販機やコインランドリーなど、硬貨しか使えない場面が結構ある。早めに 1 ユーロ 2 ユーロ硬貨は用意するべき。
- ・ 2月のフランス、ドイツはとにかく寒い。防寒対策はしっかりと。女性ならタイツを多めに

持っていくズボンの下に履くと暖か。ドイツは外が寒い分建物の中はかなり暖かく、フランスは寒さがマシな分中まで寒かった。

- ・ 現地では徒歩での移動も長いので、体力も必要。履き慣れた靴で。あと無理しない。
- ・ 機内ではインターネットが繋がらない。研修全体を通して、ネットが自由に使えるとは言い難いので事前に調べられることは調べておくとよい。
- ・ オフラインで使える翻訳アプリ、もしくは紙の辞書は必須。
- ・ ただしフリーWi-FiのあるところならSNSやソーシャルゲームもできる。
- ・ 寮のWi-Fiに関しては部屋による。同じ寮でも部屋を移ったら全く繋がらなくなった。
- ・ **空港周辺は物価が高い**。ジュース1本3ユーロ(450円くらい)して驚いた。空港を離れれば日本と変わらないくらいなので焦らなくていい。
- ・ 初日は空港近くなので水がバカ高い。水は2日分くらいは持って行った方がいい。
- ・ 初めは店に入って食事をとるのも苦労する。食べ損ねたときのためにも食べ物は持っていこう。
- ・ 現地で購入したティッシュペーパーは品質がよろしくないなので、日本から持っていくほうがいい。寮にティッシュがないのと寒いので予想以上にティッシュは使う。
- ・ 洗濯するなら洗濯ネットと洗剤忘れずに。ハンガーも多めに必要。
- ・ **寮のタオルは変えてもらえない**。清掃も基本入らない。タオルは多めに持っていこう。
- ・ シャンプーなど洗剤の泡立ちには確かに悪い。向こうで買ったものは大丈夫。寮の備え付けは期待しないこと。
- ・ 乾燥がひどい。普段使わない人もリップクリーム必須。
- ・ 体調は本当にあっという間に崩れる。**必ず薬は余裕をもって持っていくこと**。あとお粥のような食べやすいものも(向こうの食事は病気のときにはキツイです。私は3日リンゴだけ食べて過ごしました)。
- ・ 意外と学割があるので**学生証持ち歩こう**。
- ・ トラム(路面電車)の1日乗車兼をおそらく買うことになるが、これを持っていないと恐ろしい額の罰金を食らう上意外とチェックがある。違法乗車は絶対やめよう。
- ・ 直前になってから準備すると、**テスト期間に差し掛かって忙しない**のでお早めに
- ・ 事前授業も結構テスト期間&レポート提出に差し掛かるので、テスト勉強・レポートは早めに準備しておくのと、そもそもあまり講義が忙しくない学期に行った方がいいです。

### 3. 研修費用 (さしつかえなければおおよその金額を教えてください)

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	13万円	
海外旅行保険	2万円	
研修費(授業料・宿泊代等)	7万円	
食費	2万円	
交通費	4万円	TGV(フランスの高速鉄道)を利用したので高めです
その他(小遣い、通信費など)	5万円	
<b>計</b>	<b>33万円</b>	

自由記述欄 \* 現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓

これを読んでいる人が私と同じ失敗をしないよう、失敗談を中心に書きます。

まず先生にお金を借りました。そういう事態になった原因は大きく2つあります。一つ目は現地で先生に支払う分の代金を把握していなかったことで、現金が足りなくなったことです。2つ目は向こうでカードが使えなかったことです。使えなかった1枚しか持っていかなかった上、現金は少額にしていたので、要するに詰みです。

**カードは使えることを確認したうえで複数枚持っていこう&現金大事**

次はシャワーを浴びているときに急にお湯が出なくなりました。極寒です。私は裸で泡だらけだったので、同室の子がホテルの方と交渉してくれました。結果部屋を移ることになりました。



↑これがお湯が出なくなったシャワー      ↑別の寮のシャワー

見た目は一番きれいだったのですが…      見ての通り床がべちゃべちゃになります



ついでに寮の部屋

初めの一週間、慣れない異国で奮闘しつつ毎日遅くまで活動していました。特に半日でパリを巡ったのは忙しなかったけれどとても楽しかったです。一日平均10km、多いときは20km近く歩きました。

そうやって無理した結果、熱が出ました。かなりの高熱で、研修終わるまで部屋で過ごすことになりました。

一度体調を崩すと、慣れない環境で完治するのは困難です。同室の子にも先生にも、メンバー全員に迷惑をかけるし、そもそも自分が一番悔しかったです。おいしいはずのものも脂っこくて食べられない。楽しみにしていた研修に参加できない。

ヤバい！と思ったらちゃんと先生に相談して、ひどくなる前に休みましょう。研修を通して無理はしない。はじめ1週間全力で遊んで残りをベッドで過ごすより、2週間フルに楽しんだ方がコスパいいです。

また薬をもっていきましょう。全日飲んでもなくならないくらい余裕をもって。私は持って行った薬を早々に飲み切って、先生や同室の子にいただくこととなりました。

私の初めての留学はここに書ききれないくらいの失敗に溢れたものとなりました。初日1ℓ4.5ユーロの水を買ったらのちにそれがぼったくりであることに気づいたり…。お土産を窓際に置いておいたら結露で全部びちゃびちゃになっていたのはかなりショックでした。そんな失敗ばかりでも、留学は間違いなく行ってよかったと思えるよい経験です。楽しかったし、何より行く前と帰った後で価値観が全然違います。

普通はこんなに失敗しないのもっといい経験になると思います。もし留学に行くかどうか迷っていて、これを読んでいるなら、行くことをお勧めします。

ただし準備はしっかりと！



# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月  
所属 & 学年 | 工学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日～3月4日

## 1. 報告事項

①履修を決めたときに掲げた目標は3つあります。1つ目は、ヨーロッパの街を歩き、街のつくりを調べる。2つ目は、西洋建築を実際にみて体験すること。3つ目は、欧州における文化を学び、視野を広げることです。

②目標は3つとも達成できたと思います。

1つ目の目標に関してはとても多くのことを学び、体験することができました。この研修では事前に調査をして現地で調査結果を発表しました。欧州の街を調べる前に今住んでいる名古屋の歴史と都市計画について、授業で学んでいたことに加え、都市センターで調べ、大学の教授にお話を伺い、名古屋市都市計画課の方にお話を伺いました。名古屋の街のことを調べて行ったからこそ、現地で名古屋と比較したり疑問を持ったりすることができたと思います。また、滞在したランス、ストラスブール、フライブルク各都市において都市計画や歴史について、観光では聞けないガイドや街歩きの機会がありました。名古屋を含め、4つの街は1990年代前半で戦争の被害にあっていて、その痕跡が残り、それぞれ異なる方向性で復興していました。また、何が街を魅力的にしているのかを学び、考えました。ランスでは古くから残る道や建物と第一次大戦後の復興時の建築家によって設計されたアールデコの街並み。アルザス地方の都市や街では統一された構法による景観。フライブルクでは戦前の街並みを再建したところや、自動車を減らしたことによる街の活気などです。また重要なことは、どの都市においても街の景観づくりに市民が参加していることだと思いました。

2つ目の目標の西洋建築に関しても知識不足はありましたが、日本では経験できないことを経験できたと思います。3つの都市を中心にたくさんの街に出かけ、それぞれの街でカテドラルに訪れることができました。建設に200年以上かかり、また完成してから500年以上経つ空間は写真では分からないものだと思います。ランス市の市庁舎、ストラスブールの欧州評議会の内部などたくさんの建築物を実際に見ることができました。知識不足と準備不足で有名建築を巡ることはできませんでした。これから建築史を学びたいと強く思いました。

3つ目の文化についても、旅行では経験できないことができたと思います。特に、欧州評議会を訪れ、ナッツヴィラー=シュトゥットホフ強制収容所を訪れ、ヨーロッパについての知識が深まるとともに日本について、未来について考える機会になりました。また、フランス、ドイツの2カ国に滞在できたこと、両方の文化的背景を持つアルザス地方に滞在できたことも、日本とは異なる大陸の文化を知ることによって役に立ったと思います。

③履修を終え、自分自身の考え方や行動に変化が見られるかということについてですが、私は興味を持ち、知りたいと思う分野が広がったということが変化だと思います。具体的には、歴史、

経済、世界情勢、言語です。研修中は自らの知識不足を痛感しました。もっと知っていれば良かったと思う場面が何度もありました。また、今まではあまり歴史に興味がなかったのですが、調査で名古屋の歴史を調べ、研修中も歴史を学ぶ機会がたくさんあり、歴史を学ぶことの楽しさを知ることができたと思います。コミュニケーションの手段としての英語の大切さも改めて感じることができました。この短期研修で得た経験を忘れず、これからの学びにつなげていきたいと思えます。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

私は様々なものを捨てて参加した研修でしたが、準備段階を含めこの研修から得られたものは大きかったと思います。とても楽しく、有意義な研修でした。私は参加して良かったです。

## 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	円	
海外旅行保険	15,000 円	
研修費（授業料・宿泊代等）	235,000 円	航空運賃を含む
食費	円	
交通費	30,000 円	
その他（小遣い、通信費など）	60,000 円	食費を含む
<b>計</b>	<b>約 34 万円</b>	

自由記述欄 \*現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓

地図を覚えられるぐらい滞在した3つの街はたくさん歩きました。

周りの都市に電車に乗っていくのはとても楽しく、良い経験になりました。

石畳の街

教会のひんやりとした空気

パイプオルガンの響きなど行かないとわからないことがたくさんありました。

# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月  
所属&学年 | 工学部 3年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

### ・真面目な報告 1

私の専門が航空分野なので、航空大国であるフランスの航空分野への関心がよくわかる報告を行う。駅のコンビニなどで雑誌が売っているのだが（これは日本と同じ）航空、宇宙分野の雑誌が3~4種類ほど並んでいた。またその内容が結構高度なのである（私が読める範囲の話だが）日本では書店でないと航空系の雑誌が買えないし、その内容もどちらかと言えば技術的な話題というよりは趣味的で情動的な話題が多いのだが、フランスの航空雑誌は技術的な話題、経済的な話題、政治的な話題などが豊富（もちろん趣味的な話題もあるが）であった。気軽に変わる雑誌であるから特殊な人がこの本を買っているのではなく広く一般の人に浸透していると思われる。ここから、フランス人の航空分野への関心の高さ理解の深さがうかがえる。またTGVによる移動の際に強く思った事だがとにかく国土が広く平野が多い、これなら気軽に実験を行えるであろう。こうした点がフランスの航空分野の基礎体力になっていると思われる。

### ・真面目な報告 2

今回の研修の裏テーマは、「街づくりは如何に行われるべきか？」ではないかと思う。

例としてランスは豊富な歴史的な遺物を生かす方向に街を作っているし、ストラスブールは土地の歴史的な文脈を意識した役割を担う事を意識していた、またフライブルクは未来を見据えて車の街から、環境を意識した街へと市民の力で変化を果たしていた。

では名古屋はどうだろうか？今後の名古屋がどの様に作られるべきか具体的な政策、もしくはイメージやヴィジョンなどはあるのだろうか？私の出身が名古屋ではない事も関係しているかもしれないが、私は将来の名古屋の街づくりの具体案などを知らない。おそらくではあるが、今後名古屋はこうあるべきだという明確なアイデアを持っている名古屋市民は少ないのではないだろうか。市民各々が自覚的に名古屋の今後についてのヴィジョンを持って街づくりに取り組めば名古屋はより魅力的な街になるかもしれない。と、まあ、問題提起は出来るのだが答えを考えると難しい。名古屋の雑多さがある種の魅力であると考えられるので統一的なテーマを打ち出すというのはかなり難儀な作業なのだと思う。そもそも名古屋というくくりが大きすぎるかもしれない、比較対象となった前述の都市よりも名古屋の人口は遥かに多い。

現実的には区単位で考えるべきかもしれない。

### ・個人的な報告

1年時で履修していたフランス語を実際に使用できる貴重な機会であり、現地で実際に会話する事で自身の語学力を確認し、今後の学習への強いモチベーションを得られた。

ドイツに関しては硬いイメージを持っていたが、フライブルクの人は親切であり（英語で概ね会話ができるし）ドイツへの印象がポジティブなものになった。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

大きな変化のきっかけとなる貴重な機会ですが、参加する為に要求される水準は本格的な留学に比べ格段に易しいものです。なるべく早くにあなたがこのプログラムに参加する事を強く推奨します。

### 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	17万円	
海外旅行保険	2万円	
研修費（授業料・宿泊代等）	7万円	全体移動の交通費を含む
食費	10万円	1日60ユーロ分食べていると仮定して (実際はそんなにならない!?)
交通費	2万円	自由行動で発生した費用
その他（小遣い、通信費など）	6万円	おみやげなど
<b>計</b>	<b>44</b>	<b>万円</b>

自由記述欄 \*現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓

自由行動の時間を利用してストラスブールからオークニスブール城へと向かったがストラスブールの案内所で聞いていたよりも最寄駅からはるかに遠くやむを得ずタクシーを利用する事になった。この際にフランス語でタクシーを呼び出す語学力がない事に気づいた。やむを得ず現地の親切な人に英語と簡単なフランス語でタクシーを呼んでほしいと頼んだ。タクシーにのり行き先を伝える事は出来たが、メータがぐんぐんと上がっていく。何とか支払いきれる範囲に収まったがとても焦った。城そのものは非常に素晴らしいところであった。帰りの際もお土産屋さんの人にタクシーを呼んでもらうことになった、そして再びぐんぐんとメータが上がっていくのである。

ここから得られる教訓として

- 1 どうしようもないときは現地の人に助けを求めるべきである。
- 2 現地の人々が皆、英語ができると思わない方が良い。
- 3 出くわすかもしれないシチュエーションでのフレーズは用意しておいた方が良い。
- 4 観光案内をうのみにしない。などが挙げられる。

以下写真

他にも素晴らしい景色がたくさんあるがそれは是非あなたの目で確かめてみてほしい。

ノートルダム大聖堂 (ランス)



オークニクスブル城 外観





# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月  
所属 & 学年 | 工学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

観光ではないということ意識し、現地の街や人をよく観察して日本とは違うところをたくさん発見するというのが渡航前の私の目標でした。歴史や宗教の違いがあるので日本との違いを挙げれば切りがありませんので、違いを発見しようと努力していた中で私が一番身にしみて感じたことを報告します。

やはり海外では言葉の壁によって思うようにいかないことがたくさんありました。この研修では本当にいろいろな場所に行く機会が与えられ、そのたびにガイドの方が英語で説明してください。ただし、ガイドさんの英語は私たちが聞き慣れたアメリカ式の発音ではなくフランス人ガイドならフランス式、ドイツ人ならドイツ式発音の英語です。単純に私のリスニング力不足もありますが、半分聞き取ればよい方でした。少ないながらも聞き取れた中から疑問に思うことは多かったのですが質問できませんでした。英語でどう表現しているのかわからなかった訳ではありません、頭の中ではそれらしい英語を組み立てることは出来ていました。なぜ声に出せなかったのかということ自分の発音に自信が無かったりして「オープンマインド」になりきれなかったからだと思います。つまり語学力というよりは「心の持ち方」の問題だったと気づきました。

上で述べたようにフランス人にはフランス人の英語、ドイツ人にはドイツ人の英語があると気づいたので日本人の私は発音が下手でも堂々と聞き直っていればよいとわかりました。(もちろん上手になる努力は必要ですが、気負わなくてよいという意味です。) 大切なのは、「オープンマインド」になってコミュニケーションをとる姿勢だということを感じました。

オープンマインドになるというのは日本で日本語の会話をしている練習できる事なので、今後は初対面の人と会話するときは、この研修で学んだことを思い出してコミュニケーションしようと思います。この研修を通して、海外または日本国内だが外国人がいる環境という選択肢へのハードルが下がったように思います。今後は会社選びや会社に入ってからこの経験を活かしていきたいです。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

二週間という短い期間ではありますが、学べるものがたくさんあるので非常におすすめの研修でした。

## 3. 研修費用 (さしつかえなければおおよその金額を教えてください)

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	13万円	
海外旅行保険	1.5万円	
研修費(授業料・宿泊代等)	約500ユーロ	
食費	5万円	
交通費	0.5万円	
その他(小遣い、通信費など)	3万円	
<b>計</b>	<b>約30万円</b>	

自由記述欄 \*現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓



大聖堂はやっぱりすごい



ドイツのソーセージはやっぱりうまかった。



お店はどこもいい雰囲気

# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月  
所属 & 学年 | 文学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

私は普段日本文学の勉強をしている。また落語が好きで、その研究をしていたり、実際演じていたりもする。海外に行くことによって、それら日本の文化を相対的に見られる視点を獲得しようと考えた、というのが受講の当初の目的である。ランス大学にて日本の文化及び名古屋に関するプレゼンテーションを行うという機会があったのだが、そこでフランス語を用いての落語を行った。披露しての現地の人々の反応から、彼らがどのようなものを面白いと感じるのか、何が笑いに繋がるのかということ考えた。

“寿限無”という演目を行ったのであるが、長い名前を必死に喋っているところでは大抵誰しもが笑っているのだが、「名前が長すぎてコブがひっこんじまったよ」(寿限無にも数パターンある内で一番オーソドックスなオチ)というオチになるとそれほど笑わない人がいるのだ。この点について少し考察した。これは一重に“間”の問題であると思う。長い名前の部分では噺家が息をつかせず話しているため“間”が存在せず、語り手によって明らかに非日常的な空間が演出されることとなる。一方オチの部分では、観客がその可笑しさを認識するための“間”が存在する。つまり噺家がオチを言った後に意図的に作られた僅かな時間で、聞き手がその可笑しさを理解しなければならないのだ。フランスに於いて前者が笑いになり、後者が笑いにならなかったということはフランス人の笑いの“ツボ”について考える大きなヒントたりうる。と同時に、日本で落語が笑いを生み出す仕組み、例えば噺家と聞き手の中で、何か共有されている前提的知識(話のプロット、オチに関するもの)が存在する必要があるのか等、を考える手がかりともなるだろう。そのためには後者の“間”を多く取り込んだ演目を海外で行い、反応を伺うという比較実験が必要だろう。近い内に行きたい。また、海外では風刺ネタというのが広く受け入れられており、その傾向はスタンダップコメディで見られるだろう。その事実は以前から何となく知っていたのだが、ストラスブールにある美術館を訪れた際、実際にフランス人が風刺画を見て吹き出しているのを私は目の当たりにした。少なくとも現在に於いて、海外での笑いは日本のそれよりも社会や政治と密接である。

と述べている私であるが、今回気づいたのは“意外と日本について無知な私”である。落語に関する書を読んでいると、全く知らない事柄などが多く目について、それを痛感した。欧州での“笑い”について考えたが、日本でのそれについてすら実は依然全く分からぬ。今回欧州に初上陸したのであるが、実は九州に上陸したことが無いのだ。私は日本について学ばなければならないことが多くある。しかしながら、やはり海外について学ぶ、海外で学ぶというのは必要なことだ。幸い我々にはその機会がある。その機会はやはり活かさねばならぬだろう。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

「貴方が海外を求めているのではない、海外が貴方を求めているのだ！」

よく聞く話であるが、以前に比べ海外への扉はより開放されていると言える。大学でもこのように海外留学のためのプログラムや、それへの支援体制が充実している。この背景には“グローバル化だ”と叫ばれている社会の変化があるのは言うまでも無い。

「おいら、未来永劫に渡って日本から出ないもん！」と、鎖国を考えている人もいるだろう。しかし、何度も言うように“ぐろーばるか”である。現在日本の大企業の多くが海外に支社を持っていたり、海外で何かしらの活動を行っていたりする。社会に出た際、会社によっていきなり海外に飛ばされた時、何か行かざるを得なくなった時のことを考えてみると恐ろしい限りだ。もう我々は“ぐろーばるか”から逃れられないのである！“学び”を名古屋大学のキャンパス内、日本で完結させて良い時代ではないのだ。そこを超えて学ばなければならないこと、超えないと学べないことの方が多いただろう。

確かに海外での生活はキツイことや、カルチャーショックの連続でもある。遠藤周作『留学』などを読むべし。私も僅か二週間の海外生活であったが、それでもそういった事は多々あった。まず飯が合わない、そして己の英語能力が想像以上に低い。そこから自分に足りないこと、そして日本でしなければならないことも分かった。“如何にして苦しんだか”そして“如何にして乗り越えたか”それら全て人生経験として貴方を成長させる糧となるのだ。

### 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	160,000 円	
海外旅行保険	20,000 円	何かの時のために絶対必要。 少ない掛け金、大きな安心。
研修費（授業料・宿泊代等）	70,000 円	
食費	30,000 円	レストランは高い場合が多い。 寮で自炊した場合、一食2～3ユーロで済む。
交通費	15,000 円	タクシー代が思いの外高かった。
その他（小遣い、通信費など）	40,000 円	クレジットカードの暗証番号を忘れて使えなかったのは我ながら愚かだった。
計	33 万円	

## ドキュメンタリー・オブ・全学教養科目特別講義（欧州における文化）

11時間のフライトを終えると、そこは欧州であった。

2018年の2月下旬より海外全学教養科目特別講義に参加し、欧州の地に降り立った。これはそのほぼ全記録である。春休みの徒然に任せてキーボードをピコピコと叩いていると、二万字を超えるこの報告書が完成した。

### ○留学前夜まで

旅の理想は「漢なら裸一貫貧乏旅！」みたいなスタイルである。荷物は小さければ小さいほどスタイリッシュな旅姿となる。しかし実際はそうもいかない。そもそも、裸一貫は寒いし公然わいせつ罪で捕まる。転ばぬ先の杖、準備は入念にすべきだ。まず第一に私の場合、郷里の母の心配がもの凄かった。出発まで電話で「あんた、あれ持ったかん!?」「金はあるのかん!？」とくれば、重装備にならずにはいられまい。孝行息子、悪く言えばマザコンの私である故、親の言うことは基本聞いちゃう。「トラベラーズチェック持って行け」とも言われたが、悲しいかなトラベラーズチェック

は平成半ばにしてその歴史に終止符を打っている。母よ、旅行事情のアップデートは早めにしておいてくれよ。そしてこれは最大の心配事であるが私は胃腸が弱い。胃腸に爆弾を抱えている。ストレスが原因ですぐピーピーになったりする。普段名古屋千種区と昭和区だけを生活圏としている私が欧州なんて行った日には、もう胃腸が大爆発するレベルのダメージが予想されるのだ。最早テロである。それ故に「ヤクの密輸か」というくらいの大量の胃腸薬を荷物として持っていった。当然の帰結として受託荷物の大きさ・重量制限ギリギリの荷物一式が出来上がった。

折角海外に行くのだからこれを契機に…と11月くらいからフランス語とドイツ語を自学した。当初はせめて日常会話レベルまで、という目標を掲げていた。しかし今回気づいたのだが、座学だけでは語学は身に付かないものなのだ。「書く」「読む」ができて「話す」「聞く」がどうにも出来ぬ。8年間くらい勉強してる英語がなかなか使えるレベルにまでならない原因をここに見いだした。やはり数か月くらいその言語圏にプチこまれるぐらいしないと駄目だ。「その言語を使えないと社会に参画できない、ずっと異邦人のまま」というハングリーな状況が語学学習には一番効くのだろう。そもそも日本語でも日常会話で文法を折り目正しく遵守して話している人間はいないだろう。大学生だって「私は、恋人を欲しいと思っています。」なんて言わずに「彼女ほしい!」と言うだろう。言わないか。つまり言語は「伝えること」を主眼に置かなければならない。伝えられない言語に意味は無い。そういう意味ではやはり留学は有為だ。因みに私は中国語を選択していたのだが、仏語、独語に注力した結果、中国語の授業の単位がかなり危うい目に遭わせてしまった。

フランス語に関しては、学習しなければならなかった背景にはもう一つある。今回の研修には「日本文化の発信」というテーマもあった。ランス大学で日本及び名古屋の文化について現地の人々に発表するのだ。そこで私は落語研究会に所属していることから「落語」を発表することにしたのだが、担当教官に「僕う、落語、外国語でできますけどお。やろうと思えばあ。」というような軽口を叩いてしまったのだ。馬鹿馬鹿、私の馬鹿、ボカボカ!まさか本当にやることになるとは。文法書、辞書、Google翻訳を用いて落語の脚本を仏語訳する。これは仏語ビギナーにとっては厳しい作業だった。つくづく私は勤勉だ。勤勉さが己の首を締める。演目は「寿限無」にした。なぜなら一番楽そうだったからだ。しかし、某大御所芸人が『『寿限無』なんてどこが面白いのかわからねえ』という発言をしていたことを思いだし、総毛立った。確かに名前が長いという滑稽さだけで話の筋はさほど面白くない上に、欧米の名前は日本人の名前より確実に長い訳であるから(ミドルネームなるものもある)、私たちと欧州の人では名前の「長い」の尺度が全く違うということもある。「Where が面白いんですか?」そうであれば大事故になりかねない。Amazonで侍のチョンマゲのカツラと、おもちゃの刀を購入した。もし落語がどうにもウケなかった場合、これを使った一芸を披露してやろう、という云わば“保険”である。それでも駄目ならセーヌ川に身を投げようぞ。

出発の一週間前に発表のリハーサルがあったので、そこで皆に仏語落語を披露した。これがどうだったかと言うと、一切ウケないのだ。ここまでウケないとは…と絶望しかけたが、よく考えたら仏語の落語など日本人にとっては何を言ってるかわからないに決まっているではないか。噺がオチたかも認識できないのだ。仏語圏の人々ならきっと大爆笑だろうよ。おう、そうだろうよ。先生は「ほとんど聞き取れた。」と。安堵…いやちょっと待っておくんなし。「ほとんど」と言うことは「一部は」聞き取り不能ということなのか。本番まで要練習のようだ。これはいろんな先生に聞いたので間違いないことなのだが、こういった実物提示を利用した文化発表は説明だけのものに比べて格段に分かりやすいそうだ。和菓子に関する発表を行う女の子たちは実際に和菓子を配るといふ。私も発表前に観衆に高級和菓子を配り「これで嘘でも良いから笑ってください、シルブプレ〜!」とやろうか。名付けて「冬のランスに咲くサクラ大作戦」略して「サクランス」。

兎に角、出発の前週は「調整期間」と称して何の予定も入れなかった。インフルエンザが流行っているからだ。どこかでうつされてはいけない。土壇場で行けなくなるとはもう立ち直れない。幼き日の私は重大な行事を目の前にすると熱を出す子であったという。故、この一週間は健康的引きこもり生活を送ることにする。その割には一つ大きめの口内炎ができた。しかしあまりに暇だ。仏語の追い込みに加えて、この期間に文庫本を10冊くらい読んだ。書籍代が馬鹿にならぬ。

## ○留学前夜

早めに布団に入ってみるも全く寝れず。明日からの研修に対する緊張というもの勿論原因の一つではあるが、私は現地の時間に体内時計を合わせるべくこの一週間「おそ寝・おそ起き」を心がけていた。ネットで見た「時差ぼけ防止法」



を実践したのだ。その「おそ寝・おそ起き」に体が順応し、「早寝・早起き」を拒絶する体になってしまったのだろう。結局三時間も寝れなかった。

## ○2月18日～欧州上陸

中部国際空港は名古屋市内にあると思っていた。まさか常滑市にあるとは。海に臨むうらぶれた工業地帯を電車で行くと到着する。しかし眠い。時差が生じていないにも関わらず眠い。昨日寝られなかったせいである。時差ぼけ対策のせいで眠気に苦しむとは、これぞまさに本末転倒。車窓を流れる日本の風景を目に焼き付けておく。



飛行機中での11時間は何とも暇だ。座席の前に取り付けられたモニターで映画を映画を見ることが出来る。しかしそれも限度というものがあり、何本か見るとそれほど興味もないディズニーのアニメーション映画なども見るようになった。

欧州の地に初めて降り立ったのは、フランクフルト空港で乗り継ぎを行う際である。テレビや映画で見たような海外の光景を現実に見るといのはやはり面白いものだ。「まわり外国人だらけやんけ！」と言っていたが、よく考えれば欧州にあっては我々こそが“外国人”なのである。



“パリ＝シャルルド・ゴール空港”…命名の発想的には“高知龍馬空港”と全く同じではないか。しかしなんだろう、このゴージャス・ラグジュアリー・オシャンティーな感じは、“高知龍馬空港”には無い感覚である。日本人の横文字コンプレックスがこの謎の感覚の原因なのかもしれない。私は「高知龍馬空港」を応援している。あと「鳥取砂丘コナン空港」も。因みにシャルルド・ゴールの職業を、今までは世界史の教科書にあるラジオのマイクに向かってはいる写真のイメージから「ラジオDJ」だと思いついていたが、つい先日フランスの歴史に関する本を読んで初めて「第二次大戦の英雄」であるということが分かった。これは本研修がもたらした知識の一つである。CDG空港はとてとても広大だ。ホテルまで行くバスがなかなか空港の敷地から出ないのだ。『西遊記』で孫悟空がお釈迦様の掌の上から飛び出せなかったように、我々もド・ゴールの掌から出ることはできないのだ。皆お疲れのようで、バスのなかでもうつらうつらしていた。欧州時間はまだ宵の口でも日本時間では現在未明、つまり実質ほぼ完徹の状態だ。今日は早く就寝。

## ○2月19日～飲んで飲まれて

初めてランスの町を見た時の感動たるや。めさめさ綺麗なのだ。石畳の地面、軒を連ねるオサレ・ハウジング。走っているのは外車ばかり、そりゃそうじゃ。マクドナルドですらもそれっぽい佇まいに設計され、町の風景に見事に同化している。日本でも景観を守るべき地域であれば、コンビニなどの色調が暗くされたりすることもあるが、ここまで大胆には同化されていない。例えるなら、日本の緑一杯の山間部のコンビニの看板が迷彩柄になっているようなものだ。つまりは、日本ではありえないレベルの同化なのだ。そんな町並みを抜けてランス大学のキャンパスに行く。明後日の発表に向けた準備のためである。と言っても、フランス語落語の脚本を覚えるぐらいしかすることもなし。ゆるゆると過ごす。



ラン大職員の方々が我々のために歓迎会を開いてくださった。シャンパンで有名なシャンパーニュ地方だけあって、やはりシャンパンが振る舞われた。過度にはしゃいでしまった私は、酒を飲まない人の分まで代わりに飲む、ということをしてしまい、そもそも酒になれていないのが疲労も相まって、少量なのにグデグデになってしまった。寮に帰って食卓に着くも全く飯が喉を通らない。それどころか、何か込み上げてくるものすら感じる。結局出されたものに殆ど手をつけず残すこととなった。床に着くも吐き気で殆ど寝られず。研修期間中の禁酒を堅く誓う。

## ○2月20日～ランスの町を歩く

今まで私の中の“ベスト建築ナンバーワン”は東京の国立新美術館だった。それが今日塗り替えられた。ランスのカセドラル（ノートルダム大聖堂）がナンバーワンだ。カセドラルには“陰”がない。細部まで完全に作り込まれており、人為がその建築全てに行き渡っている。建築全ての箇所スポットライトが当てられているようである。谷崎潤一郎は『陰影礼賛』の中で、陰のある日本的美意識について論じたが（日本画などで何も書かれていない空白の部分がある、そういう行き渡らない部分に美意識を見いだす）、この美意識とは全く正反対であるように思われた。おそらく誰しもがこの建築を目の当たりにすれば圧倒されるだろうと思う。シャガールがデザインしたステンドグラスも恐ろしく神々しいものである。「イエス様が、光っておられるう〜！」と、無宗教の民ながら感動。



トー宮殿の展示物。歴史、歴史、現代アート、歴史、現代アート、現代アート、歴史。この二つが見事に調和…しているのか知らん。それは鑑賞者の感性による。私はそれぞれ別個のものとして楽しめた。

昼飯はカセドラルが窓外に見えるお洒落なレストランにて食する。スタイリッシュなボーイが給仕してくれるのだが、何かしらの香水でもつけているらしく、通るたびに良い香りがするようで、女子生徒が「海外の男性は良いニオイがする」と言う。そっと自分の着ているジャンパーのにおいを嗅ぐ。自宅の押し入れのにおいがした。パンとサラダ、完食できず。海外の飯が身体に合わぬ。己の胃腸との戦いがここに始まった。



午後からは Pommery 社のシャンパン醸造所を見学する。洞窟のような醸造所を Pommery 社の方のガイドを受けながらまわる。酒、酒、酒、現代アート、酒、酒、現代アート、酒。何故だろう、フランス人は意外なところに現代アートを挿入したがる。やはり試飲としてシャンパンが出された。断るのも残すのもばつが悪いので、やむを得ず昨日の禁酒宣言を撤回。確実に昨日飲んだものよりも美味であるのが素人の感覚でも

分かる。さすが一流。明日からの禁酒を堅く誓う。

夕方より「アール・デコツアー」と銘打った企画。ランス市の建築によく見られる建築様式「アール・デコ」に関する内容であるはずなのだが、ガイドの口からアール・デコという言葉がなかなか出てこない。「第一次大戦後ランスが如何なる都市計画を元に復興してきたか」という内容が殆どを占めたが、それはそれでとても興味深いものであった。戦後の何も無い焼け跡からの出発という点では日本と同じだが、日本は全く新しい町を作ったのに対し、ランスは過去に範を採った。名古屋は“日本随一の魅力無しシティ”として知られるが、ランスを手本とした町作りをして魅力アップというのは流石に無理でしょう。既にあれだけ色々建ててしまっているのだから。

## ○2月21日～落語、ウケる

フランス語での落語披露については前述の通り不安が大きかった。午前中からこの発表があったのだが、披露直前になってその不安はピークを迎えた。まず、客が少ない。前日に「教授と生徒20名ほど」と聞いていたがその半分もいなかった。しかも我々の発表時間はかなり“おす”こととなり、客も徐々に減っていった。私の番までには最初いた数の半分ほどになっていたのではないかと。客がいなければ気分も乗らないし、十分なリアクションも得られないだろう。そう予想した。そして何より、客が若干飽きてきている感がむんむんしていた。時間の関係で質疑応答が出来なかったのも原因だろう。私なら寝る。

時間がおしていたのもあって、発表のトリである私が出る頃には観客がばたばたし始めている感じがあった。どうやら会場の使用時間に限りがあるらしく、そろそろ会場を空けなくてはならないという。しかし私はやるべきことをやらねばならぬ。尺のことなど気にせず、発表の最初に「私は今からフランス語を話しますが、これは Google 翻訳の力です。」などと余計なことを言い、掴みを狙う。掴めたかどうかは分からぬ。落語がいかなるものかを拙いフランス語で説明。そしてついに落語を披露するときが来た。「落語は座布団の上で行う」と説明したにも関わらず座布団の用意が出来なかったので、「ここにイマジナリー座布団があります。あるんだよ。見えるだろう。」などと言い、落語を前に場を温める。温まったかどうかは分からぬ。「OK、Show must go on !」これは言うてみたかっただけだ。



自分で言うのも何だが、落語は結構上手く出来た。いつも日本で、日本語で行うものよりは確実に。でもってこれが何とウケた。想像以上にウケた。うひょひょ〜。Amazon で買った侍セットを装備し、「サムラ〜イ！」と叫ぶというくだりもかなり反応が良く、全体的に大満足の発表であった。語りだけで行う落語の、場面の状況がイメージしづらいことを想定し、パワーポイントで自作のアニメーションを投影していたのであるがこれも有効であった（写真参照）。我々の発表であるが全体的に好評だったようで、これからも継続してこういった交流を、的な話になったと言う。あの“飽きてきている感”は何だったのだ。愛情表現へたくそか。



午後からランス大学の文系キャンパスに移動し、文学部長にキャンパスを案内して頂く。文系の学部でこれだけの土地と金が投入されているというのが全くの驚きである。日本ではそんなことあり得ない上に、何なら「文学部なんて廃止しちめえ」などという物騒な話まで出ているほどだ。羨ましい限りである。人文学に対する考えであったり、意識の違いであったりがここに現れているのか。こんなキャンパスであったなら私の勉強も捗り、英語ぺらぺら、高品質レポート大量生産マシンの如くになっていただろうと思う。

夕刻から「留学生交流パーティー」なるものがあった。パーティーなど日本にいても殆ど参加しないものだ。故にどういう居住まいでいればいいのか全く分からぬ。何かしら話のタネが必要だろうということで、友人たちのアドバイスに従って、午前中の落語で使った着物を着ていく。会場に午前中我々の発表の世話をした下さったランス大のマダムがいた。マダムは私の所へ来、嬉々として「あれやって頂戴よ」的なことを言う。何でも留学生が特技を披露する、という企画があるというのだ。やるしかないでしょうよ。着ちゃってるんだもん、和服。あるんだもん、発表に使うパワーポイントのデータが入った USB。何と言う偶然か。いや必然？この瞬間、私の中でパーティーは終わった。ここは最早パーティー会場などではない、“試合会場のリング”だ。私はさながらゴングを待つボクサー。和服が戦闘服。体温の上昇を感じる。

ところが、中々ゴングが鳴らないのだ。他の国からの留学生達が歌う、歌う、歌う。ビヨンセを、R&B を、Hip Hop を。もう何十分“My hobby・Song”を聞いたか分からぬ。紅白歌合戦かというくらい歌う。全然私の番が回ってこない。上がっていた体温が下がり始める。カメルーンからの留学生による自作ポエムの朗読が終わると、遂にゴングが鳴った。歌、ポエム、落語、近年稀に見るエキセントリックなプログラムである。

パワーポイントの準備を整える間、場をつなぐ。Beatles の“Yesterday”の替え歌を歌う。「Yesterday, the day after today is yesterday ！いや tomorrow やろ！」めさめさスベる。思いがけず先制パンチを食らった。フランスにはスベり笑いなど存在しない。フランス人はウケ or ナッシングの世界観で生きている。かの侍セットに再び登場して頂き、「サムラ〜イ！」形勢を立て直す。低い英語能力にも関わらず、こうして大勢の外国人たちの前に立っている男こそ、真のサムライである。命知らず。でもってして、愈々落語本編の披露。またもや上手くいき、ウケる。「ここが私のアナスカイスカイ、ランス！」とランスの青空の下で叫びたいような晴れ晴れとした気持ちである。フランス移住を考える。



かくして私がパーティーの華になったかということ、そうではない。「お前が着ているその服は何と言うのだ。」と聞いて来る者がある。「Oh! This is Kimono!」で終わり、話が續かない。話すことが無いのだ。外国の人と何を話したら良いのか分からぬ。日本人でも初対面では何を話して良いのか分からない、況んや外国人をや。「HAHA！へい、ジョニー！You が食べてるそのサンドイッチ、見るからにバサバサだね！グランドキャニオンの地層でも食ってるのかと思ったよ！」とか陽気に話せれば良いものを。見かけは目立っているのに内面が伴わない人見知り、“パーティーの華”ならぬ“パーティーの造花”である。かくして私は早々にパーティー会場を後にするのであった。しかし、やはり落語は仕込んでおいて良かった。来年はフランス語で能か狂言か歌舞伎が出来る人間が数人この研修プログラムに参加して欲しいものだ。

## ○2月22日～さようなランス





クレジットカード死す。日本を出る前にカードの暗証番号を確認して来なかったのが運の尽きであった。今朝、トラムの運賃をカードで払おうとしたところ、暗証番号の入力を求められるが、暗証番号が全く記憶に無いのだ。ええいままよ、と自分の誕生日、母の誕生日、電話番号の…と色々試して見るも全て違うらしく、あえなくカードにロックがかかる。つまりはカードが使えなくなったのだ。カード会社に連絡するも「いや、ロックかかったのであれば、どうしようも無いっすね。」とのこと。このただの分厚い四角形と化したカードを使ってメンコでもしてやろうか、とも思った

が、一枚ではそれも叶わぬ。現金を多めに持ってきてはいるが、これ以降多少の節約を強いられることとなる。

今日でランスにさよならランスするわけであるが、なかなか名残惜しい。4日も同じ町にいれば嫌でもその地理に詳しくなるもので、「フジタチャペルの最寄り駅」というトリッキーな集合場所にも難なく行くことが出来た。フジタチャペルはレオナルドフジタのパトロンであったワイン会社マム社の目の前にごちんまりと建っている。私はレオナルドフジタにちょっとした思い出がある。先日美術館で行われた学生限定のイベントで、全員参加の「くじ引き大会」なるコーナーがあった。参加者全員に数字が割り振られていて、くじで引かれた数字に該当する者が、順番に景品を貰えるというありきたりな企画だ。最も初めに呼ばれた者が一位で、最新の展覧会の図版を貰える。二位、三位等は上位で、ピカソ展、印象派展など人気の展覧会の図版が順々に貰える。私は下から五位くらいだったのだが、その景品で貰ったのがレオナルドフジタ展の図版だったのだ。見たところ私以下、下位五位全員の景品がレオナルドフジタ展の図版だった。レオナルドフジタ、余っているのか。だからといって下位の景品に使うなよ、フジタが可哀想だろう！家に帰ってから「こんなに可愛らしく猫の絵を描くのにな。マイナーなんだな」と図版を広げながら思った。そんな日本を僂んで、フジタはフランスに渡り、ここランスの地に作品を遺した。

午後からは、ランス美術館を見学する。美術館の学芸員の方に逐一作品に関する説明をして頂けるという貴重な機会。こんな機会は滅多に無いそう。名古屋で開催された「ランス美術館展」が記憶に新しく、いくつかの作品は「お前、また会ったな。元気してたか？」という感じだった。常設展であるレベルが揃えられているというのは、やはり芸術の国というだけのことはある。この美術館気に入った、年間パスポート買おう。無駄になるだろうから止した。

サンレミ旧大修道院に行く。ユネスコの世界遺産の登録としては「ランスのノートルダム大聖堂、サンレミ旧大修道院及びトー宮殿」となっているので、その中で二つ行って一つだけ行かないとなると、何となく惜しい感じがする。ボウリングでピンだけ残すのと同じ感じである。サンレミは市の中心からやや離れているので、バスで行く。サンレミには歴史博物館が隣接しており、まず間違えてそこに入る。そこは貴族の屋敷のような造りになっている。回廊にて「じいや！じいやを呼んで！私、お父様の決めた許嫁とは結婚いたしません！」と、“庶民の男と恋に落ちる貴族の娘”的な台詞を芝居っぽく口にしてみる。歴史博物館には、まあ歴史的価値がありそうな展示品が沢山あるのだが、説明書きが全く読めないの、何がなにやら。博物館を後にして、サンレミの本丸を攻める。なかなか入り口が見つからず、暫くふらふらして、ようやくのことで入り口が見つかる。入ってみると、これまた荘厳。やはりユネスコの目に狂いは無い。とりあえず旅行に行く場合、その土地にある世界遺産には足を運んでおくべきだ。ユネスコを信じろ。

夕方、ランス市庁舎を訪問。市庁舎の建物も彫刻など手が込んでいらっしゃる。市議会場にも入れてもらう。何と議員席にも皆で座らせてもらう。これは本当に貴重な経験だ。今後一生座ることは無いだろうこの椅子。再びこの椅子に座ろうと思うと、まずフランス国籍を取り、有力者とパイプを作り、それを後背に出馬し、地道な選挙活動を…としなければならない訳である。LABELLE 助役と会う。助役は姉妹都市提携を結んだ名古屋が気に入っているらしく、自慢げに「マイ・スマートフォン」と言いながら、スマホを我々に見せてくれる。何とホーム画面が名古屋城の画像なのだ。本気かよ。私もあまりにカセドラルが気に入っていたので、ホーム画面をその画像にしていたということ思い出す。ここがチャンスとばかりに私もスマホを取り出し、自慢げに「マイ・スマートフォン」と言いながら助役にホーム画面を見せる。喜んだのか助役が握手をしてくださった。ランスの偉い人と、名古屋の全く偉くない大学生の固い握手。この手は二度と洗いません。



ランス最後の晚餐。寿司屋を見つけたのだが、看板にエンジェルフィッシュが描かれている。この看板から察するに海外の寿司屋、これは信用できない（大いに偏見が入っているかもしれない）。何となく、グッピー一貫、ネオンテトラ軍艦、クマノミ巻きなどカラフルな熱帯のお魚さん達が調理されて出てきそうな感じがする。というわけで入ったのがモロッコ料理の店である。前に述べた通り、私は欧州の飯が口に合わない。欧州の飯が合わない人間の口が、北アフリカの飯とベストカップルになる訳が無い。すぐさま胃腸とモロッコ料理の間で別れ話が始まった。胃腸による一方的な拒絶。「旨い」というのは分かるのだから、正式に言うと、舌は欧州の飯に合ってるが、胃腸が合っていないのだ。

## ○2月23日～飛んでストラスブール

朝ランスからTGVに乗り、ストラスブールに向かう。パリからランス間もそうだったが、無限に田園風景が車窓を流れていく。その中に時々小規模の村落が見える、あと家畜。その村落、ドラクエの“主人公が生まれた村”感がある。各集落に一つずつ教会の三角屋根が目立って見える。これもまたドラクエっぽい。教会が無いとセーブ出来ないものね。最初のうちは綺麗な風景だな、などと思っていたが、これだけ同じ風景が無限に続くといふ加減飽きる。『世界の車窓から』という番組があるが、実際の世界の車窓がこんなに面白みに欠けるとは。あの番組はテレットテレットテレットという音楽で内容の無味乾燥を誤魔化している、とか思いながら暫し眠る（日本に帰ってから同番組を見たが全然無味乾燥じゃ無かった）。

ストラスブールと初対面を果たす。ランスに比べやや近代的な印象を駅前の様子から受ける。宿舍の近くにジャスコ的な大型ショッピングセンターがあり、そこをぶらつくにつれ、その印象はより強いものとなる。昼飯はレストランでアルガス料理を食す。見事完食。ストラスブールはアルガスの中心都市であるから、アルガス料理を完食するということはすなわち、私の胃腸がストラスブールにマッチしているということの意味する。「これは期待が持てますぞえ」という胃腸の声が聞こえた。

午後から欧州評議会の見学に行く。普段はEU加盟各国のお偉いさんが議論しているであろう議場の見学などをさせて頂く、ガイド付きで。かなり前から「イギリスがEUを抜ける」とか言ってますが、今後EUはどうなりますか」という質問をEUの人間にしてやろう、と考えていたが、いざ質問するぞと言うときになって、うまく英語が出てこず、尚且つ、この質問は場違いなのではないか、という逡巡もあり機を失ってしまい、結局質問できなかった。これはもの凄い後悔である。恐らく今後、メディアを通じてその関連のニュースを耳目に挟むたび思い出される後悔である。



## ○2月24日～ストラスブールを味わい尽くす

朝からマダムのガイドと共にストラスブールの町を歩く。ストラスブール大聖堂を訪れる。Wikipediaによるとユゴーは「巨大で繊細な驚異」とこの建築を評したという。いい得て妙である。ランスのカセドラルの豪壮さとは違い、この建築からは繊細な印象を受ける。美しい町であるが、ガイドを聞いてみると、「川が家畜の血で赤く染まった」「公開処刑が行われていた」など血生臭い歴史もあつたりしてかなり興味深い。アルガス地方特有の木組みの建築群が見られる。

しかし寒い。数年に一度の寒波が到来しているというのだ。頭を寒さから守らねばならぬ、と思い土産物屋で帽子を買うことにする。お土産屋で売っている帽子だからやはり、「ストラスブール」と地名がプリントされているダサイものが多い。その中で私が目をつけたのは、アルガス地方のシンボルである“コウノトリ”の形をした帽子である。これが他の帽子に比べ安い、そして尚且つ面白いのだ。ディズニーランドでミッキーのカチューシャをした人を多く見かける。恐らく日本の人口の中であのカチューシャを持っている人間の比率は割と高いだろう。しかし、町中でミッキーのカチューシャをした人を見たことは無い。この事実からディズニーランドを出た後、二度と目の見えないというあのカチューシャの悲しい運命がわかると思う。そしてこのコウノトリ帽子は同じ運命を辿るだろう。それを分かっているのに関わらず、私は帽子を手元にレジに向かっていった。愚か。こういうところが、旅のテンションの恐ろしい点である。

その帽子を被って、昼食のためレストランに入る。我々が座った席の隣に親戚一同が集結したような老若男女寄り合わさったグループ客がいた。彼らは飯も食べ終わっているようで、子供達が若干その集会にも飽きているような感じを





漂わせている。そんな時、彼らは酔狂な帽子を被った東洋人を発見する。私だ。彼らは笑い、フランス語で何やら騒ぎ始める。子供に好かれるというのは良いことである。ここでは「好かれる」と「ナメられる」の区別はしない。私が子供達に親指を突き立てた拳をぐーと見せると、子供達も同じようにぐーとする。ぐーぐーぐーと連続で同じことをすると、また子供達も同じようにする。エド・はるみ往年のギャグを介した、フランスの子供達との心温まる交流である。ただ、彼らはこちらの食事にも構わずぐーぐーぐーぐーやってくるので、こちらとしても食事を傍に置いてぐーぐーぐーとノってあげなければならず、最後の方は面倒になってきた。きやつら、確実に私のことをナメてきている。

昼食後は大聖堂の上が展望台になっているのでそこに上る。年齢のせいか階段が足腰に来る。展望台からはストラスブール市街を一望できる。壮観。

ストラスブールの川を渡る遊覧船に乗る。ストラスブールの市街地は川に囲まれているのだが、その川を遊覧し尽くすのだ。日本語ガイドもあるのだが、午前中英語で受けたガイドの内容と重なるところも多かった。つまりは午前中のガイドの復習である。船から見るストラスブールの町も美しい。ストラスブールに在る EU の諸機関も川から全て見られる。一時間半程度の船旅である。やや眠くなる。



その後ウンゲラー美術館を観覧。トミー・ウンゲラーはストラスブール出身のイラストレーターで日本でも絵本『すてきな三にんぐみ』などで知られる。私もそれを幼少期に読んだ記憶がある。美術館には何か社会を風刺したような作品や、写真をコラージュして面白可笑しくしたような作品などが展示されている。観客のフランス人がそれを見て吹き出すように笑っているのだ。これが欧州人の笑いのツボなのであろうか。ランスでフランス人から笑いを取るべく四苦八苦した私としては、大きなヒントを得られたような気がする。現在の日本では風刺が笑いにまで昇華されている例は本当に少ない。政治を扱う笑いには勇気が要るのかもしれない。

夕食はストラスブールの町をいい感じの店を求めてさ迷った挙げ句、日本料理店に行くことに決める。私は基本的に海外の日本料理を信用していない。同じ通りに日本料理店が二店舗ある。最初に訪れた店は、「何名様ですか」と奥から出てきたウェイトレスが“ナチュラルメイクのデーモン閣下”のような悪魔的メイクをしていて驚いた。目の周囲をパンダのように黒く塗り、黒いルージュ、ギザギザのピアスを着けていた。因みに彼女、大和撫子である。閣下曰く、その店は予約で一杯でいきなりの客は入ることが出来ないという。次に訪れた店は中国人が経営している日本料理屋である。メニューが日本語なのだが、Google 翻訳を使ったのか、その言語は日本語のようで日本語でないのだ。所々読んだだけでは分からないメニューもある。例えば、「諸肉（モロニク）」。これは色々な種類の肉を雑多に串に刺して焼いたものであるらしい。とりあえず白米が恋しくなっている私はカツ丼を注文する。カツという揚げ物を注文したものの、厨房からジュ〜という肉を揚げる音が聞こえてこないのだ。にわかに「これはインスタント飯なのではないか」という疑惑が浮上する。その話を我々がしていた時厨房から「チン」という音が聞こえた。疑惑は確信に変わる。かくして出されたカツ丼であるが、これが普通に美味しかった。久しぶりの日本の味に我が胃腸が喜んでるのが実感できる。おそらくインスタントはインスタントでも“日本製インスタント”だ。卓上にキッコーマンの醤油があった。それをがぶ飲みする。醤油をこんなに美味しく“飲む”日が来るとは思わなかった。

## ○ 2月25日～遭難しかける

朝ストラスブールを出たのが大体八時か九時くらいである。今日の我々の目的地はフランス人が愛する名城、オークニクスブール城である。前日にツーリストインフォメーションで仕入れた情報によると、城へは電車とタクシーを使って行けるという。駅から城へは約六キロの山道である、とも。

オークニクスブール城最寄りのセレスト駅に到着して驚いた。確かに、オークニクスブール城は目視できる。しかし確実に山を一つ越えた先の、さらに奥の山の頂上にあるのだ。つまりは無茶苦茶遠いのだ。絶対6キロではないし、この距離をタクシーで行くと破産しかねない。先ほどは「最寄り駅」と表現したが、全然モヨってない。インフォメーションセンターにいた蛍光オレンジの服を着た大男に城への行き方を尋ねる。大男によると、自分は偶々仕事で今日セレ



スタにただけで、全くこの地に詳しくないという。では何故お前がインフォメーションセンターにいるのだ、という疑問はさておき、大男は非常に親切に対応してくれた。土地勘のあるバスの運転手から「城へ向かうバスは存在しない」



という絶望的な情報を聞き出してただけでなく、タクシーまで呼んでくれたのだ。タクシーの行き先が“破産”かも知れないのに。

かくしてタクシーが来た。タクシーがセレスタに到着した時、既にそのメーターは50ユーロを越していた。この運転手、駅に来るまでの道のりもメーターにカウントしているのである。何たる非道か。城のある山の麓には可愛らしい村があるのだが、我々にはその景色を楽しむ余裕など全くない。我々の目は猛烈なペースで上がり続けるメーターに釘付けである。山道を越え、

オークニクスブル城に到着した。タクシーの料金はかなりまけてもらったが、それでもチップ込みで70ユーロ程（これを3人で割り勘）であった。

山頂付近には雪が残っており、雪化粧した古城が何とも美しい。しかし我々には、その悠久の歴史に思いを馳せる余裕などない。帰りをどうするか、ということで頭が一杯なのだ。経済的な事情からタクシーの車中で一旦は「歩いて下山」という結論を出していたが、外気を浴びた瞬間撤回せざるを得なかった。外気、滅茶苦茶寒いのだ。マイナス二桁の世界。「遭難」の二文字が頭をよぎった。歩いて下山は不可能、しかしタクシーは帰ってしまった。「帰れない」という意味においては既に遭難している。売店のフランス美人にたどたどしい英語で助けを求め、「私たちは日本人です。タクシーでここに来ました。しかし、帰り方が分かりません。」帰り方がわかりません、の部分に無限の情けなさがある。フランス美人は先ほどのタクシーを電話で呼び戻してくれた。更に嬉しいことに、美人によるとそのタクシーは行きと同じ値段で帰りも乗せてくれるという。美人に深謝。



タクシーが来るまで我々は城の観光を楽しんだ。城の展望台からはストラスブルを含む平野、そして隣国ドイツまでもが一望できる。

タクシーが戻った。運転手が「セレスタとコルマル、どちらに行くか。どちらも同じ料金だ。」と言う。と言いつつも、運転手はコルマルに自宅があり、そこに帰りたそうなので我々に選択権はほぼ無い。「セレスタで。」「No!」問答無用のコルマル。我々が乗車した時点でメーターは既に破滅的な感じになっていた。前述の理由（カード死亡）により私には金が無い。山道は葡萄畑を突っ切る道に続いていた。一面

の葡萄畑。もっとも、冬だからなのか、全ての木が切られていて幹と数本の枝しか残っていなかった。つまりは「一面葡萄の木の幹だらけ」と言った方が正確である。夏場に来ればさぞや綺麗なのだろう。今はさながら荒野である。運転手は遠い国からの観光客を乗せているからなのか、何故か嬉しげに運転している。我々は全くそんな気になれない。すでにメーターが100ユーロの大台を突破していたのだ。「行きと同じ値段」とは聞いていたが、どこまで信用しているのか分からない。というのも、タクシーが全く知らない村に入ったのだ。察するに、運転手は我々遠い国からの客人にアルザスの美しい村々を見せて回ろうとしているらしい。後部座席の我々は思った。「カモにされているっ…!」と。運転手は東アジアの富める国から来た気弱そうな腐れ学生から観光と引き換えに莫大な金を巻き上げようとしているのだ。その通り気弱な、尚且つ運転手を悲しませたくない私は喜んだふりで「おお！ファビラス！ビューティフル！」と英語で言いながら、同じトーンで「おいおい、メーター見ろよ。破産だぞ。」と運転手に分からないように隣の席の友に日本語で言っていた。メーターは私の所持金を上回ろうとしていた。



自棄である。私は落語をすることにした。ひょっとするとまけてくれるかも知れぬ。葡萄畑を突っ切ってひた走るタクシーの車中で私は観客である運転手一人のために落語「寿限無」を披露した。これがウケた。運転手は運転もままならないほどに笑った。果てはスマートフォンを取りだし、友人にも聞かせるためにと録音も始めた。とにもかくにも良い雰囲気である。まけてくれ。これほどまでに特殊な環境で落語が行われたことは歴史上あるのだろうか。

コルマールは美しい村だ。『美女と野獣』のモデルになった村だと言う。「自由の女神」をデザインした人の故郷。そして運転手の故郷でもある。道中、運転手は丁寧に見所を説明してくれた。そんなことは最早どうでもいい。我々の財布がデッド・オア・アライブなのだ。かくして駅に到着、運命のお会計の時を迎えた。会計は…まけて80ユーロほど。運転手、愛してる。結局、彼は善人、めさめさ良い人だったのだ。彼は自宅へ帰るついでに我々をコルマールまで連れていってくれた。その道中に近隣の村の観光案内までしてくれた。話を聞くと、そもそもセレスタにはタクシーが無いという。つまりは、彼は日曜日にわざわざ隣町から我々のためにセレスタまで仕事に来てくれたのである。我々は感謝しても、し足りないのかもしれない。疑ったことを逆に申し訳なく感じる。海外の人々に対して警戒心を抱きすぎていた。思えば、蛍光オレンジの大男も、フランス美人も親切な良い人であった。人情味が溢れていた。我々が無事に帰ってこれたのも彼らのお陰だ。

ただよく考えると「同じ値段で」と言っていたにも関わらず、完全に値上がりしている。そもそもインフォメーションセンターのオバハンは「電車とタクシーで」と言っていたのに町にはタクシーが無い。結果として何とも言えない感じだ…。

今日得た教訓は「海外で困ったら現地の人にタクシーを呼んでもらえ」。そして「オークニクスブルは冬に行く所じゃない」。

## ○ 2月26日～一日講義を受けるなど

今日からフライブルクでの生活が始まる。宿舎である寮の近くにある公園には夜のうちは危険なので絶対に入ってはいけない、という。麻薬の取引であるとかそういう悪事が行われていたりするらしいのだ。朝のうちにそのデンジャラスな公園を通ったのだが、公園の中心に“偽カセドラル”と言うようなデカイ教会があった。そのデカイ、神聖な教会の前で夜な夜な悪事が行われているわけであるから、神も仏もあつたものではない。

それにしても、女性のいる寮生活がこんなに楽しいとは思わなんだ。日本で私が住んでいるのは男子寮である。男子寮という名の“魔窟”である。廊下を歩いていると死んだ目をした住人たちとすれ違う。恐らく、そういう自分も客観的に見れば、死んだ目をして寮の廊下を歩いているのだろうと思う。寮の食堂に行っても、洗濯場に行っても、死んだ目をした男たちが黙々と何か自分の目の前にあることをしている。その光景を想像して頂きたし。気分が滅入ってくるだろう。しかしここでは朝飯、夕飯時に食堂に行くとき女性たちが集まって談笑しながら、何かしら料理をしたり、食事をとったりしているのだ。華がある！輝いている！もう帰りたくない！晋の時代、釣り人が迷い込んだという“桃源郷”とは此処のことであったのか。(帰国してすぐ男子寮から引っ越した。引っ越してみると男子寮が懐かしく、良いところだったように感じる。結局、人はいつだって現状に満足出来ない生き物なんだね。)



朝からフライブルク大学で Intercultural Communication の授業である。文化とは何か、から、いかにして異文化圏にある人々と接するか、という内容まで学んだ。6時間程も授業時間があり、内容としては盛りだくさんである。ラン大の留学生交流パーティーで堂々の途中退場を決め込んだような低コミュニケーション能力な私の目からは鱗がぼろぼろ。

昼飯はフラ大の学食で、肉食系男子であるから、ソーセージとポテトを乱雑に盛り付けたプレートを食べる。学食にまでソーセージを置くとは、“ドイツ=ソーセージ、ビール”というイメージであるが、本当にドイツ人はソーセージが



好きなのかもしれない。因みにビールの値段もミネラルウォーター並に安い。“日本=寿司”のイメージであるが、日本の大学の学食に寿司は無い。

授業後、フライブルクの町を暫し散策する。フライブルク大聖堂に入ると、シスターの集団が何やら一心に祈りを捧げていた。祭壇を見てみると、何とキリストの十字架が宙に浮いているのだ。何事か、と私は超自然的な現象を見ているような気がして驚いた。よく見ると、十字架を吊っているワイヤーが見えて、得心しつつも少しがっかりした。

フライブルク駅前を見て「金山駅前みたい」という感想を抱いた昨日であったが、今日フライブルクの旧市街地に踏み込んでみると、名古屋のような工業的な雰囲気は感じず、石畳が敷かれた洗練された小都市といった印象を受けた。ただ、落書きは多い。私有の建物と、教会など宗教施設以外には悉く落書きが為されていた。

## ○ 2月27日～コンサートに突撃

朝からフライブルクの町を歩きながら、主にフライブルクのエコ都市としての側面に着目したガイドを受ける。フライブルクは“環境首都”とも言われている環境に超優しい都市で、かつては排ガスで黒い森（シュヴァルツヴァルト）に酸性雨を降らすなどしていたが、住人達が悔い改め現在の如くに生まれ変わったという。確かに、吉幾三風に言うところ「車もそんなに走ってねえ」、何故なら環境に優しくないからだ。人々の主な交通手段はトラムや自転車である。ガイドをしてくださったおじ様であるが、彼は環境保護に関して非常に熱心な方である。ガイド中ディーゼル車が傍を通るや「Diesel! It's a shame! (恥だ!)」、「車を二台、三台と持つ奴はstupidだ! (愚かだ!)」と毒づいていた。もし彼が、“世界のTOYOTA”のお膝元、超自動車社会の名古屋に来たら泡を吹いて卒倒してしまうのではないか。



夜より、フライブルクのコンサートホールで行われる交響楽団のコンサートを見に行く。昼間の内にガールズが「私たち、今日の夜はコンサートに行くの。」と言っているのを聞いていたので、全く計画の無い我々が「おお、コンサート。そりゃ文化的でええやんけ、ウホウホ!」とその計画を丸パクリしたのである。チケットの予約など言わずもがな出来ないのが、当日券を買う。これが学生料金で8ユーロとめさめさ安い。田舎者丸出して「お得、お得。うきゃきゃ!」と嬉々として入場。しかし我々はすぐに後悔させられることとなる。見渡す限り、“見るからに上流階級”という様な人々だらけなのだ。己の姿をもう一度見る。間違っても、妙ちくりんなチェックのパーカーに薄汚いジーンズという出で立ちで来るところでは無かった。中には楽団のパトロン的な人までいるのだが、そもそも我々は今日誰が演奏するのかすらも知らない。我々が周囲から浮きまくりながらベンチに腰掛けてみると、



目の前をエレガントなドレスを着たスタイル抜群のドイツ美人が闊歩していった。彼女が通り過ぎた後、鼻をくくんするともの凄いいにおいがする。これが“残り香”というやつか。「うきゃきゃ」と喜ぶ田舎者。

でもって、演奏が始まる。音楽に明るくないので詳しいことはよく知らないのだが、まあ何となく上手いというのは分かる。何となく何処かで聞いたことあるような曲が演奏されているので楽しめた。45分ほど演奏したところで楽団がはげ、観客は拍手。終わるのが早いな、と思いながらも席を立つ。しかし他の観客は誰も帰らない。ロビーの所で上流階級めいた人々は群れ集まって、ワインの杯を傾けるなどしているのだ。これはどういうことだ、と扉の開け閉めをする係員に訊ねると、これはコンサートが終わったわけではなく、単なる20分間の休憩であるらしい。コンサートに関する常識の無さをここで露呈する。



休憩が明けた後半、今まで弦楽器だけであった楽団に管楽器が追加されていた。こうしてコンサートがさらにエキサイティングだったかと言うと、そうではない。段々眠くなっていくのだ。すでに午後九時を回っていた。そしてまた45分ほど演奏を聴く。ここで、衝撃の事実が判明する。この演奏が「後半」では無く「第二部」であるということだ。つまり、第何部構成かのうちの第二部、ということで、即ち演奏はまだまだ続くのだ。残念ながら我々には門限というものがある、そして眠気も。こそこそとコンサートホールを後にした。

## ○2月28日～フライブルクの山道完全制覇

朝っぱらからルームメイトは祖国（「日本」の格好つけた言い方）のガールフレンドとテレビ電話をしている。女が覚えたてのギターを弾き、男がメロディーを歌う。一昔前に流行ったラブソングである。何ともスロートな情景である。私も祖国にいる恋人に電話したくなかった。先輩が部屋に来る。曰く、昨日私が先輩から頂いて食べた「生肉をちょよちょよと加工しただけの製品」は、期限が二週間前のものだったらしい。何よりも胃腸を大事に思っている私である。それを知っていたら絶対食べなかった。断じて許さぬ。

午前中はフライブルクの環境保全策についての授業を聞く。昼からのフィールドワークは蓄積された疲労などを考慮した上で、私たちはフライブルクを適当に散策することに決めた。大聖堂前の市場にてホットドッグを食べる。店員に「with onion?」と聞かれる。勿論 yes である。同じものを昨日も食しているため、その味は確実だと分かっている。特にソーセージは筆舌に尽くしがたき。ドイツには環境のためを思って肉を食べない「菜食主義者」がいるらしいが、そういった人々は「with onion, without ソーセージ!」と注文するのだろうか。それ普通のパンだよ。

大聖堂裏から伸びる山道の終点、つまりフライブルク近くの山（名前が分からぬ）の頂を目指すことになった。山の中腹に小洒落たカフェがある。昨日は閉まっていたが今日は客で賑わっていた。トイレ休憩も兼ねて入店する。優しいウェイトレスのおばさんが注文を聞きに来た。私は普通のバニラアイスを食べたいのだが、メニューにはアルコール入りのバニラアイスしか見当たらない。焦った私は思わず片言の日本語でおばさんに「オンリーばにらあいすハ、ドレデスカ?」と尋ねていた。片言の日本語なら外国の人にも通じるのでは、という咄嗟に下した謎の判断。おばさんは勿論、きょとんとしている。日本の英語教育の限界をここに見てとれよう。日本の英語教育はスピーキングにも力を入れるべきである。このような悲劇を二度と繰り返さないために！



山頂に上ると物見櫓のような塔があり、そこからフライブルクの町が一望できた。黒い森までも見渡せる。確かに黒い。山を挟んだフライブルクの反対側にも街があるようで、そこに行くことも出来そうではあるが、そこからフライブルクに帰ることが出来るかどうかは知らぬので、行かぬ（我々にはオークニクスブルの失敗がある）。冒険は金と体力があるときにすべきだ。せめてもの冒険として、下り道は上りとは違う道を通ることにした。さして驚くことでもないのだが、その道はフライブルクの時計台の裏に通じていた。この瞬間に我々はフライブルクの山道という山道を制覇したといっても良いのではないかな。

## ○3月1日～冬、再びのアルザス



朝からバスに乗り、ストラスブールでガイドして頂いたマダムと共にナッツヴァイラー＝シュトルツホフ強制収容所へ向かう。雪山の上にあるため、尋常では無いほど寒い。戦時下、ナチ党はこんなところに政治犯やレジスタンス達を閉じ込めていたというから残酷である。鉄格子や処刑台、死体を焼く窯などが展示されており非常に生々しい。今までに無いほど真剣な面持ちで、眉間に皺をよせながらガイドを聞いていたが、これは内容のシリアスさもさることながら、寒さで顔面が硬直していたことにもよる。

昼食のためにフランスはアルザス地方の村、一路オベルネ村へ赴く。アルザス地方ということは、あいつの出番である。コウノトリの帽子を被らねばならぬ。しっかり鞆の中に忍ばせていた帽子を被る。先ほど真剣な面持ちでガイドを

聞いていた男と同一人物とは思えない酔狂さである。

昼食は“聖ピエール”の切り身を野菜などと共にホワイトソースに投入し、それを白米にかけたプレートを食べ。“聖ピエール”とは、私はよく分からず適当にオーダーしたのであるが、ガイドのマダムによると聖人の名前であると同時に、町の名前、そして魚の名前であるそうだ。聖ピエールはとても旨い白身魚だった。欧州の飯が胃腸に合わない私であるが、これはペロリと完食した。ありがとう、聖ピエール！一回聖ピエールの顔を拝んでおこうと、後で“聖ピエール（スペース）魚”で Google 検索すると、口元のだらしない、何とも不細工な、尚且つ不味そうな魚の画像が出てきた。人も魚も見た目で判断してはいけない、ということが今日はっきりわかった。大事なのは心…いや味である。というより己の胃腸との相性？

オベルネ村からリックヴィル村へバス移動。車窓の外に以前訪れたオークニクスブル城が見える。マダム曰く、フランス人の国内観光地人気ランキング第三位がオークニクスブル城であるとのこと。パリのエッフェル塔やルーブル美術館を押さえて、である。何とは無しに訪れた場所がそれほどの人気スポットであったとは。きっと夏場はアクセスが良いのだろう。冬場に行く所ではなかったが。



リックヴィル村へ到着。おとぎ話に出てくるような可愛らしい村である。インスタ映えの要塞である。親に連れられた小さな子供達が私の頭の上のコウノトリを楽しそうに見ている。こういう大人になってはいけないよ、ちびっ子達。ここで暫しの間自由行動。少々便意を催したのでトイレを探す。中々見つからない。ようやく見つけ、用を終えたときにはすでに自由時間が残り約 10 分になっていた。実家へ可愛らしいメルヘン人形でも土産に買おうと思っていたが、それを探す時間も無い。やむを得ず、バスの止まっている駐車場に一番近い土産物屋で少々グロテスクな魔女の人形を買う。しわだらけの顔が妙にリアルで何とも陰気くさい代物だ。バスの中でいじっていると、魔女のスカートの中にボタンのようなものが付いていることに気づく。押ししてみると、フランス語で何やらブツブツと喋るのだ。実に陰気くさい。この魔女は郷里の母に贈ることにした。

### ○3月2日～バブルに沸く

クレジットカードが使えなくなった経緯は前述の通りである。そこで私は多少節約をすることになった。と言っても、何かを我慢するということは無く、例えば目の前に何となく良さげな土産物があったとして、“買いたい”と“買わなくても良い”が五分五分くらいであれば“買わない”、ぐらいの緩やかな節約であった。そういった生活を続けているうちに最終日に至り、めさめさお金が余った。額にして 200 ユーロ以上である。三重県出身の江戸っ子としては、宵越しの金は持たねえ。研修越しのユーロも持たねえ。全部使い切ってやろう、ということ で研修最終日にしてバブルが到来した。

午前中の空き時間を利用して、土産物を買う、買う。“買いたい”と“買わなくてもよい”が 4 対 6 の比率であっても買う。黒い森名物の鳩時計二つ、風呂に浮かべるようなゴム製アヒルを何個か、女性の胸部がでかでかとプリントされたヤらしいポストカード数枚、葛飾北斎の浮世絵があしらわれたウクレレなど。飛行機に積み込めるか不安になる程度には買ったのであった。それだけ

午後からは UNISEUM 博物館を見学する。この博物館はフラ大の歴史に関する資料が展示されているのだ。大学博物館と侮るなかれ、フラ大はオーストラリア貴族によって 15 世紀に創設されたものであるから、それはそれはものすごいボリュームな内容となっている。高校倫理の授業で習ったフッサールやハイデガーもフラ大と所縁がある。



いよいよ最後の晩餐である。今回の研修中、中々胃腸がヨーロッパナイズされずに終始食事には困らされた。しかしやはり、最後となればやはり良いものを食そう、幸い財布には金がある、ということになった。一軒目に訪れたレストランはボーイに「コックが休みだからソーセージくらいしか出せねえ」と言われたので、これは「良いものを食す」という最後の晩餐の趣旨に逸れてしまうと判断し、ボーイおすすめの別の店に行くことになった。そうして訪れた二軒目のレストランで、私はドイツの伝統料理“ザワークラウト”（17 ユーロくらいする）をオーダーする。これも“聖ピエ

ール”と同じく、何かよく分から無いままの適当なオーダーである。ザワークラウトが来るまで友人達と「研修楽しかったね」的な、最後の晚餐に相応しい会話をする。兎角する内にザワークラウトが運ばれてきた。ナムル状の黄色い野菜が皿の上に敷き詰められており、その野菜の上に豚の肉塊がドンと置かれている。さあ、どんなものが早速食してみようぞ、とそのナムル状の野菜をフォークで掬い口元に近づけた瞬間、私の意識は幼少期に飛んだ。祖母の家で過ごした夏休み、平成の世であったがトイレが汲み取り式であった。その汲み取り式トイレが放つ臭いは未だに思い出せるほど強烈だったのであるが、野菜からその臭いがするのだ。その野菜が皿に敷き詰められている。何だ、これは。胃腸の前に、口が受け付けぬ。何とか豚の肉塊だけ食せた。Google で調べてみると、ザワークラウトは発酵食品で、日本で言うところの“納豆”、つまりは好みの分かれるところである。「日本で言うところの“納豆”」・・・というが、日本では皿に納豆を敷き詰めたりはしない。例え水戸市民であっても。

このように研修中、食文化の違い、「胃腸のカルチャーショック」には終始苦しめられた。「ヤクの密輸か」というくらいに持ってきた大量の胃腸薬は効き目があったのか無かったのかは分からぬが、量は半分くらいに減っていた。こうして書くと、何となく深刻な事態のような感じに読めるかもしれないが、実際そうでも無い。研修中は「胃腸弱い芸人」として、食事が合わないという苦境もユーモアに昇華し楽しめたと思う。留学で大事なのはこういう所だったりするのではないか。とりあえず、もし私が将来的に留学する場合、段ボールに八丁味噌や醤油、インスタント麺、胃腸薬など胃腸が喜ぶものや日本食を段ボールに詰めて私の元へ送って頂きたし。我が胃腸共々心待ちにしております。

## ○研修後日談

家に帰るまでが海外研修だす！空路で11時間、名古屋の中部国際空港に到着。郷里の母に嬉し恥ずかしながら帰って参りました、という旨の電話をかける。「あら帰って来たんかん。無事で良かったわ。で、あんた胃腸は大丈夫やったか？」流石産みの親である、息子の事をよく分かっている。「大丈夫じゃなかったよ。」

ルフトハンザドイツ航空から名鉄線への乗り換え。この名前の落差というか、高低差がすごい。かくして自宅である魔窟にたどり着く。我が居室の万年床に身を横たえる。少々泣きそうにもなっている私である。10畳に満たない広さの下宿が30畳以上にも感じられる。要はめさめさ寂しいのである。研修が終わってしまったことが。そして咳しても一人、屁をこいても一人。時差ぼけで眠いのでそのまま眠る。

帰国から数日後に研修を振り返っての報告会が行われる。参加者各々が海外で受けたカルチャーショックであるとか、海外生活の中で得られた所感であるとかを語り合う。私は、〈欧州の人の笑いのツボ、間の研究〉〈語学学習のあるべき姿（スピーキングをしよう）〉〈海外の飯が合わなかったこと〉について主に話した。

今回の研修の中で私は気持ちを新たにすることが多い。視野は確実に広がった。と言うより、今までの私の視野狭くに気づかされるが多かった。日本では決して見ることの出来ない景色がそこには広がっていた。触れたことの無い文化がそこにはあった。自分の学ぶべき場所が日本国内だけでない、ということも実感できた。そして海外で学ぶことの意義も。そのために必要なのはまず外国語の勉強である。研修中は拙い英語のせいで情けない思いをすることが多かったし、数ヵ月学んだだけのフランス語、ドイツ語は使い物にならなかった。いい加減、語学の目的を“試験で良い点をとるため”から“海外でコミュニケーションをとるため”に移さねばならぬ。と、いい感じのことを言いつつも、欧州から帰ってきてからの数日を、時差ぼけを言い訳にしての睡眠と、部屋中に散らかった二週間分の荷物の整理とに費やしていた。このままではいけない、折角の初期衝動をこのまま有耶無耶にするわけにはいかないのだ。そうして私は海外留学室のホームページを再び開くのであった。



# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月

所属&学年 | 学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

私は履修を決めたときに2つの目標を掲げました。1つは、新しいことに挑戦し、自分の視野を広げるということです。私は、中学生から吹奏楽を続けていて、自分の時間のほとんどサクソと向き合ってきました。サクソを通じて様々な経験をし、様々なことを学んできましたが、大学生になった時ふと立ち止まって振り返ったとき、自分の世界がほとんどサクソによる経験に形成されているように感じ、自分の視野を広げる必要があると考え、大学では様々なことに挑戦しようと決心しました。そして、その1つとして異国の文化を肌で感じることができるこの研修を履修しようと決めました。

この目標に関して、2週間という短い期間ではありましたが、実際にフランスやドイツの生活に肌で触れたことによって様々な発見があり、自分の視野を広げることに繋がったと考えています。例えば、道路のあり方にはとても驚きました。フランスでは、赤信号でも横断歩道を渡ったり、車が通ったりしていました。また、歩道と車道の区別が曖昧であることに驚きました。その姿はまるで「自動車と歩行者が共存している」ようであると感じました。また、フランス、ドイツとも路面電車が発達しており、自家用車がなくても生活がしやすい環境が整っているというところも日本と異なる点であると感じました。また、食事では食べ慣れたものだけでなく、新しいものにも挑戦するように心がけました。レストランではお昼の時間帯からアルコールを飲んでいるひとが少なくなく、ここにも文化の差を感じました。塩味の強いお料理が多かったのもこのような風習に影響されているのではないかと考えました。また、ドイツで店員さんに「1」を伝えようとして、人差し指を立てながら、「one」といいましたが、首をかき上げられ、親指を立てて「ein?」と聞き返されたことがありました。数字の数え方のジェスチャーにも違いがありとても驚きました。このように、日本における「当たり前」が万国共通であると思い込んでいた自分に気づいたことで、せまかった自分の視野を認識し、広い視野をもつことにつながると考えています。

二つ目に、「日本と欧州における芸術との関わり方の違い」を考えるという目標を掲げました。中高生の中に芸術と関わる中で、日本において、芸術は分からないと思われがちで人々と芸術の間に壁があることを感じていました。しかし、ドイツやフランスなどヨーロッパ諸国では日本よりも身近なものであると聞き、その理由を検討したいと考え、この目標を掲げました。

二つ目の目標を達成するために、日本におけると比較しながら特に芸術にア

ンテナを張って観察しました。まず、驚いたのは、トー宮殿において歴史的な展示物と一緒に現代アートが展示されていたことです。そのことから、芸術に歴史的価値だけを求めているのではなく、歴史的な彫刻も現代アートも同じ芸術としてとらえられていることを感じ、驚きました。また、日本では、美術品は額に入れられ、これ以上近づいてはならないというラインが引いてある一方で、フランスやドイツの美術館において額に作品が入っていない作品も見られ、美術品の撮影が許可されていることから芸術作品のとらえ方の違いを感じました。

また、路上で様々な楽器を演奏している人がおり、その演奏家たちの演奏がまちの人からも受け入れられていたり、フライブルク交響楽団のコンサートでは、子どもからお年寄りまで幅広い年齢のお客さんが聞きに来ていたりしました。コンサートでは、曲間の休憩では飲み物のみならず、ご飯までたべることができるようになっており、オーケストラのコンサートがレジャーの1つとして様々な世代から愛されているようでした。

このようなことから、フランスやドイツでは人々と芸術の距離が近いように感じました。調査をおこなった芸術家の方が「名古屋は、よそからきた人間や、新しいことを受け入れることに抵抗がある、保守的な都市であると感じることが多い」ということをおっしゃっていました。そのような点が名古屋において新たなものが生まれにくい原因なのではないかと今回の研修を通じて考えるようになりました。ランス市の文化遺産保護の授業の中で、今、素敵だと思われぬ建物でも遺産として守ってゆくというお話がありました。新しい価値観を受容できなければ、遺産も生まれなければ、新たな芸術も発展しません。いつの日か名古屋に住む人が「私は名古屋人でいてとてもうれしい」と思えるような町にするために、市民が主体となって変化を恐れずに魅力を発掘さらには創造していく取り組みが必要なのではないかと考えました。

履修を終えてみて自分自身に起きた大きな変化は、「英語の重要性」を認識したことだと思えます。もとより、英語はあまり得意な方ではなく、強い苦手意識をもっていました。また、日本で普通に生活している分には英語を使う機会もなく、苦手な英語に触れる機会はどんどん減って行きました。そのような状態でこの研修に参加した訳ですが、英語を使う機会がとても多く、はじめのうちは「英語ができない」というコンプレックスから話すことさえ戸惑っていました。しかし、研修も終盤になると自分が英語を発することに抵抗を感じなくなり、積極的にコミュニケーションをとることができるようになりました。そして、ある出来事がきっかけで「英語が話せるようになりたい、勉強したい」と感じるようになりました。ランス大学の図書館であるフランス人学生に声をかけられました。はじめはフランス語でした。私が、フランス語が話せないことを伝えると英語で話しかけてくれました。私が鞆につけていたキーホルダーをみて、どこで買ったの？とか日本人に初めて会った！何か困ったら助けてあげるよとか本当に気さくに親切に話しかけてくれました。とてもうれしい気持ちを伝えたかったのですが、「thank you」ということしかできませんでした。このときの悔しい気持ちが忘れられません。そのことから、英語が重要なコミュニケーションツールで

あるということを再認識することができました。また、現地の学生はだいたい母国語と英語の2カ国語を話していました。日本では多数の学生が問題なく話せるのは日本語のみのように感じます。このようなところでも日本の閉鎖的な特徴をとらえることができたような気がします。

このように今回の研修ではフランスやドイツの文化や生活を肌で感じることができ、たくさんのことを発見し、たくさんを学びました。しかし、それと同時に日本という国の文化や風土を再発見することもできました。この経験を活かして、様々な国に足を運びその土地の文化を学ぶことで日本という国の魅力を再発見していきたいです。そのためにも、語学をおろそかにせず、コミュニケーションがとれるように努力していきたいです。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

「あこがれのヨーロッパに行きたい！」という気持ちから思い切って参加してみて本当に良かったと思います。あこがれていた欧州の文化に様々な面から触れることで、その歴史的背景など多くのことを学ぶことができました。また、欧州の文化に触れたことによって日本の文化を再発見することができ、グローバルな視点をもつきっかけを持つことができました。活動の際には、仲間と助け合いながら、活動していくのでとても心強かったです。挑戦したいという気持ちさえあれば、実り多い研修になるのではないかと思います。ぜひ、チャレンジしてみてください！

## 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	200,000円	
海外旅行保険	20,000円	
研修費（授業料・宿泊代等）	55,000円	
食費	15,000円	夜ご飯はスーパーのものが多かったです。
交通費	4,000円	
その他（小遣い、通信費など）	25,000円	
<b>計</b>		<b>おおよそ32万円</b>

自由記述欄 \* 現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓

現金を持っているのが不安だったので、ユーロは少なめに用意して、積極的にクレジットカードを利用するつもりでした。しかし、自分が持っていたクレジットカードは American Express のもので、対応しているお店がなかなか見つからず、困りました。VISA か Master は対応しているお店が多いように感じました。また、海外キャッシングができるという時に便利だと感じました。現金が足りなくなりそうだった私は、自分のカードが使えるお店で、班のメンバー分のお会計をし、その分のユーロを班のメンバーからもらうという方法で乗り切りました。班のメンバーには感謝しかありません。

# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月

所属&学年 | 教育学部 1年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

### ①履修を決めたときに掲げた目標

いろいろな人と関わって、いろいろな物事を経験する。カウンセラーとして活躍する上で、海外で生活したり、短期間ではあるが留学を経験したり、外国の方と話したり、新しい考え方に触れたりすることは非常に重要。カウンセラーに限らず、社会人としても自己理解を深めることは非常に重要。ヨーロッパにおける障害者支援を学ぶ。短期留学で得た経験をこれからの生活に活かす。研修を通して興味を持った分野を学ぶ。

### ②目標を達成できたか、達成のためにどんな試みを行ったか、困難はあったか、新たな課題を得られたか

様々な場面で現地の方と交流する機会があった。また、先輩と行動したことでいろいろな経験をする事ができた。いろいろな人と関わって、いろいろな物事を経験するために積極的に話しかけてみたり、現地の生活を楽しもうとしたりした。ランス大学の留学生 Welcome Party ではランス大学で学んでいる多くの留学生と交流できた。本場ドイツのサッカーの試合を観戦した際、周りのサポーターと交流することができた。自分の英語力不足や、向こうがあまり乗ってこなかった時もあり、上手く会話できないこともあったが、多くの人と交流することができた。自己理解の面では初めての経験もあり、体調を崩してしまった。自分はあまり体も強い方ではなく、繊細な面もあることは理解していたが、改めてそういった面も理解できた。新たな課題としてはこれからもいろいろな経験を積み、自己理解を深めたいと思った。ヨーロッパの研修を通じて、改めて海外に興味を持ったので、次は近くのアジアの国も訪れてみたいと思った。

### ③履修を終え、自分自身の考え方や行動に変化は見られるか(若しくは、変化の兆しがあるか)。これまでの自分自身の考え方や行動に自信をもったか。

障害者支援については現地の発表のためにこちらで聞き取り調査などを行った。ヨーロッパの方が支援は充実していると言われたし、自分もそう思っていた。ただ実際、現地の様子を見ると、法制度についてはわからないが、障害者支援のあり方はそこまで日本と変わらないようにも感じた。街に段差も多く見られたし、空港の出入り口に喫煙所が設けられているなどむしろ日本の方が支援は充実しているようにも感じられた。実際に現地に行くことでこういった偏見もなくせるように感じた。そして、現地の方は、愛想がよい人が多いように感じた。誰でも話しているように感じた。駅員や駅の売店の店員も普通に英語を話していた。他国と陸続きでつながっているという地理的特徴や文化が影響しているように感じた。日本は島国で独特の文化があるように感じた。また、危機管理学習の影響があるかもしれないが、以前に比べ、自分の身は自分で守るという意識が強くなったように感じた。これからもいろいろな人と関わって、いろい

るな物事を経験することを続けていきたいと思った。次、海外に行くときは友達と観光でも行ってみたいと思ったし、ホームステイも良いかもしれないと思った。英語の学習は続けていきたいと思った。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

僕はこれまで海外に行ったことがなく、この研修で初めて海外に行くことができました。この研修で初海外の方も多くいらっしゃいました。履修の際、海外に行ったことがないことは全く気にする必要はありません。また、英語について、「皆、英語ができるのではないか」と心配する必要は全くありません。確かに英語がペラペラの方もいましたが、ごく少数でした。

僕は「若いうちに、それなるべく早めに一度は海外に行つといた方がいい」と本や人から見たり聞いたりしていました。また、大学のうちに一度で良いから留学してみたいとも思っていました。こういった理由から、比較的時間がある1年生でこの研修に参加しました。名古屋大学は長期休暇が比較的長く、学生が海外に行くことを促進しています。こういった研修を利用して見識を広めるのは、将来的にも非常に有効な方法だと思います。研修は僕の時は2週間ほどでした。短く感じる方もいるかもしれませんが、予定がしっかり入っていて、FWも自分たちで予定を入れることから、非常に濃い2週間でした。

友人と参加している学生もいましたが、多くは1人で研修に参加しにきていて、研修を通して仲良くなっていました。最終的には皆で仲良くなれて、充実した研修だったと思います。

まとめると、

- ・初海外であることは気にしなくていいです。
- ・英語の実力もあまり気にしなくて良いと思います。
- ・若い頃に、それなるべく早めに一度は海外に行つといた方がいいというのは、僕もそうだと思います。
- ・海外に行ってみなきゃわからないことがあるというのは、僕もそうだと思います。
- ・名古屋大学は海外に行くことを推奨しているため、奨学金などのサポートがあります。

## 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	160000 円	
海外旅行保険	17000 円	
研修費（授業料・宿泊代等）	35000 円	
食費	30000 円	
交通費	60000 円	
その他（小遣い、通信費など）	30000 円	
<b>計</b>	<b>約 33 万円</b>	

自由記述欄 \* 現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓

自分から話しかけることが重要です！！せっかく海外に来たのに日本人学生同士で話してはもったいないと、先輩と3人でいろいろな留学生に話しかけに行きました。Welcome Party中、1人で音楽を聴いている現地の学生がいたのですが、話しかけるとすごくフレンドリーに返してくれました。彼はセネガルの学生で、今年のサッカーW杯のことで盛り上がりました。な

ぜ1人で音楽を聴いていたのかは未だに謎ですが、話しかけていなければ「なんで1人で行くんだろう」で終わっていたかもしれません。日本人学生同士で話すのは気軽に楽かもしれませんが、せっかく海外に来ているのだから、現地の方と交流するチャンスがあれば、自分から積極的に話しかけることが重要だと思います！



# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月

所属&学年 | 教育学部 1年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

〈履修を決めた時に掲げた目標〉

私はこの研修を有意義なものにしたいという気持ちが強くあったため、履修を決めた時に二つの目標を掲げました。一つ目は自己表現力をつけること。そして、二つ目は海外を見ることによって日本のことをよりよく理解することです。

〈目標を達成するためにしたこと、困難、新たな課題〉

自己表現力について。留学中に現地の学生や教員に向けて行ったプレゼンテーションはとてもいい経験になりました。自分が興味のある分野を調査しましたが、その分野をよく知らない人、海外の人にもわかりやすく興味を持てる内容になるよう工夫しました。また、名古屋大学の他の学部、先輩方の発表を見て勉強になることも多々ありました。

反省点としては、自分が大学生になり自分自身が外国人として大学生や大人と話すのが初めてだったので、緊張してしまい、積極的に話せなかったことです。もっと自分から行動していく必要があると感じました。説明などを聞くことができても、質問することができず、自分の力不足を感じました。

日本をより理解するという目標は、今まで日本で当たり前だと思っていたことが当たり前でないことが多く、今まで考えたこともないようなところに日本らしさを感じることができるようになりました。例えば、フランスでは歩行者は赤信号で止まらないことを知り、日本人のルールをきっちり守る真面目さに気づいたり、フランスで店に入る時、バスや電車に乗る時に必ず挨拶する様子を見て、日本ではそれをしないからシャイで、フレンドリーじゃないと思われるのかと感じたりしました。

また、今回の研修では日本人が自分一人ではなく常に他の学生といたからこそ実現できたように感じました。欧州で見る様々なものに対して、日本ではこうだね、とか日本と同じだね、など話すことができました。その中で、日本について私が知らなかったことも教えてもらうことができました。

〈履修を終え、自分自身の考え方や行動に変化が見られるか。これまでの自分の考え方や行動に自信を持ったか〉

それぞれの国や街で、現地の人々がとても誇らしげに自分の街を紹介しているところを見て、自分がいまいる日本、名古屋にもっと自信を持つべきだなと思うようになりました。自信を持っているところを見せるだけで、それも初めて知る外国人に魅力的に感じられるのだということを自分自身が経験してわかりました。

また日本のことだけでなく、自分のことを客観的に見るできるようになった気がしま

す。アメリカでの生活を経験した私は、帰国後、無意識的に日本を否定的に見てしまうような傾向があったと思います。しかし、欧州という自分の見たことのない、経験したことのない世界に触れることで、日本の良さを再認識することができました。スーパーでお寿司や日本の醤油を見つけただけでテンションが上がって写真を撮って見たり、観光地に日本語の標識があるだけで嬉しく感じたりして自分自身が日本人であることに誇りを持っていることがわかりました。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

2週間という短い期間ではありますが、想像以上に様々なことを経験することができました。研修中、現地の人に話を聞きガイドしてもらう機会が多くあり、ただ旅行するだけではわからないようなことが聞けて勉強になります。また、全てが新鮮で刺激的な毎日を経験することができます。もしこの研修を考えているのであれば、しっかりと目標を立て、意味のあるものにしてほしいです。

## 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	15万円	
海外旅行保険	1.5万円	
研修費（授業料・宿泊代等）	6万円	
食費	3万円	
交通費	2万円	
その他（小遣い、通信費など）	3万円	
<b>計</b>	<b>30万円</b>	

# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月

所属&学年 | 教育学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

このプログラムの履修を決めた時に立てた目標は、「異文化を体感する」ということです。これは履修の動機でもあります。私は普段、同じ学部やサークルの友達といったように、同じような価値観や文化を持った人としか交流していません。そのため、この海外研修に参加することで異文化を体感し、自分の視野や考え方を広げたいと思いました。また、異文化と接したときにその文化が名古屋の文化とどのように異なっているか、名古屋がその文化から学ぶべき点は何かを考えるということをし、具体的な目標として掲げました。

この目標はおおむね達成できたと思います。体感したり見聞きしたりした異文化の中で特に印象に残ったものは2つあります。1つ目は、ランスとフライブルクには自分の住む街をよりよくすることに対して積極的な市民が多いということです。ランスには素敵な町並みや大聖堂がありますが、文化遺産保護を実施するのは市民自身という考え方が根付いているそうです。また、フライブルクは環境都市として有名なのですが、例えば保護者が小学校の屋上にソーラーパネルを設置する計画を立てるといったように、環境保護に熱心な市民が多いそうです。私の周りには「自分たちの手でこの街を良くする」という意識を持っている人が少ないと感じられ、また私自身もそのような意識を持っていないので、ランス・フライブルクの方々の積極性は新鮮に感じられました。

印象に残ったものの2つ目は、「私はランス市民であることを誇りに思う」という言葉がランス市のスローガンであるということです。ランス大学での発表のための事前調査の際、名古屋には知人・友人に対して名古屋市に買い物や遊びなどで訪れることを勧めたい人が少ないというようなことを知りました。そのため、このランスのスローガンは、名古屋市の人々とは全く異なるものだと感じました。

以上の2つの点は、つながりのあるものだと思います。自分の街に誇りを持っているから自ら街を良くしようとして、そのような活動を行うことで街が良くなりさらに誇りを持てる、といったように、良いサイクルがランス、そして恐らくフライブルクにもあるのかもしれないと感じました。そして、このような点は、他の都市と比べて魅力度が低いと言われ、市に誇りを持っている人も少ないと考えられる名古屋市が学ぶべき点なのではないかなと感じました。

目標はおおむね達成できたことと述べましたが、あまり現地の人とコミュニケーションをとることができなかったことについては後悔があります。話す機会があっても、相手の方がおっしゃっていることが聞き取れなかったり、自分の言いたいことをどう伝えたらよいか分からなかったりすることがほとんどでした。講義を受けたりガイドさんの話を聴いたりすることでも様々なことを知ることができましたが、1対1のコミュニケーションがとれたらより多くのことが分かったのではないかと思います。そのため、上記で挙げた目標を達成するには外国の人とコミュニケーションをとる能力、特に英語の運用能力を高めることが今後の課題であると感じました。

そのため、このプログラムの履修により生まれた変化の 1 つに、外国語学習へのやる気の高まりが挙げられます。これまでは、実のところ言語の授業はあまり好きではなく、特に自主的な勉強もしてきませんでした。しかし、今回の研修を通して外国語を習得することの重要性を認識し、外国語を扱えるようになりたいと思うようになりました。

また、この研修に参加したことにより、海外へ行くことや日本語の分からない人と話すことへの抵抗が減ったように感じます。言葉が分からずもどかしい思いをすることもありましたが、言葉が分からなくてもジェスチャーなどで自分の言いたいことを伝えられたこともありました。そのため、言葉が分からないからといって海外へ行くことや外国の方とのコミュニケーションを避けるのではなく、挑戦するようになりたいと思えるようになりました。

視野や考え方が広がったかどうかは現時点ではよく分かりませんが、この研修で得られた経験をもとにして今後広げていきたいと思えます。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

今年フライブルクは暖冬と言われていたそうですが、私たちが行ったときはとても寒かったです。このようにいきなり天気が変わることもあるので防寒具はしっかりと準備した方が良いと思います。私は寒さに耐えられず、向こうでニット帽と分厚い手袋を買いました。

## 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	166,000 円	
海外旅行保険	16,000 円	
研修費（授業料・宿泊代等）	33,000 円	
食費	19,000 円	
交通費	12,000 円	
その他（小遣い、通信費など）	8,000 円	Wifi (3人で1台) 代+洗濯代/お土産代は含まず
<b>計</b>		<b>25.4 万円</b>

自由記述欄 \*現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓

ストラスブールのレストランで食べた、Baeckeoffe（ベッコフ）という料理です。とてもおいしかったのでおすすめです。



# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月

所属&学年 | 経済学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

### ①履修を決めたときに掲げた目標

(1)日本や欧州の戦争についての調査を通して歴史を知り、自分なりの考えを深めること

(2)異国の文化や人々と交流して多くのことを吸収し、自らも文化や考えを発信すること

私は特に上記の2点を目標に掲げました。また、(1)と(2)を達成するために計画、準備、吟味するという過程を経て、未知な事柄に挑戦する力を付けたいと思いました。

### ②目標の達成度、達成のための試みや困難、得られた新たな課題

#### (1)戦争について

留学前の名古屋での調査において、「愛知・名古屋戦争に関する資料館」を訪れ、学芸員の方に名古屋の戦争・戦後復興についてのお話を伺いました。歴史の教科書に数ページだけ載っているような「きれいな戦後復興」が全てではなく、また、空襲によって名古屋市の中心部が焼け野原になったことで却ってゼロから現在の名古屋の姿となる街づくりを進めることができたというのも事実であると教えて頂きました。一方で、留学先のランスやフライブルクも戦争によって大きな被害を受けた街であり、戦後、ランスは遺産を守りながら現代様式を取り入れた街へ、フライブルクは世界に誇る環境都市へと発展しました。名古屋と欧州の街の戦後復興こそがそれぞれ現代の人々の生活の基礎を築き上げたのです。当時の人々の尽力に思いを馳せ、街を大切に、守るためには何をすべきか考えなくてはならないと思います。

また、フライブルクの歩道で、戦争で亡くなったユダヤ人の記録が書かれたプレートが埋められているのを見たり（自由記述欄に写真あり）、シュトゥットホフ強制収容所の見学を経て負の遺産の重要性を痛感しました。実際に目にすることは、想像以上に心に刺さりました。このような遺産を通して後世に歴史を伝えていくことは非常に大切なことであると思います。

#### (2)文化交流について

当たり前ですが、コミュニケーションのカギが「言語」であるということを知りました。英語のリスニング力がもっとあつたら、見学先でのガイドさんの説明をもっと聞き取ることができたと思います。自分の力不足を感じ、悔しかったです。一方で、ランス大学での留学生交流パーティーでは、自分の伝える意志と相手の優しささえあれば、つたない英会話でも交流できることを学びました。また、お店の店員さんが私たちを見て日本語で「ありがとう」と言ってくれたこともとても嬉しかったです。このような経験を経て、言語を使って交流する根本的な楽しさを感じることができました。一緒に留学したメンバーが積極的に意見を発信したり、英語でたくさん質問したり、物事を私とは全く違う視点から見ていたりしたことからも非常に刺激を受け、新たな学びが得られました。

### ③履修後の自分自身の考え方や行動の変化

言語の根本的な楽しさを知ったので、コミュニケーションツールとしての英語学習をもっと頑

張りたいと思いました。もしこのような機会がまたあれば、その時はもっと楽しみたいと思います。また、新しいことを始めることをいつも億劫に感じがちでしたが、少し勇気を出せば予想以上に多くの新しい物事や考えに出会えるのだと思いました。この気持ちを忘れず、これからの生活でも大切にしていきたいです。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

私は留学するまで英語が好きではなかったし、それまで海外に行ったことすらなかったのでまさか自分が留学するなんて思いもよりませんでした。ですが、「大学在学中にしかできないことがしたい」や「ヨーロッパって素敵だなあ」という気持ちと少しの勇気と親の出資の協力があって留学が実現しました。日本での調査活動や準備は確かに大変でしたが、その分とても達成感を得られたし、何より留学先での2週間は、毎日が新鮮で人生の宝物になると思います。語学方に不安を感じている人も海外に行ったことがない人もその他の人も、参加を強くお勧めします！

## 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	165,570円	
海外旅行保険	15,260円	
研修費（授業料・宿泊代等）	約 60,000円	
食費	約 30,000円	
交通費	約 35,000円	近隣の町にたくさん行きました。
その他（小遣い、通信費など）	約 15,000円	
<b>計</b>	<b>約 32万円</b>	

自由記述欄 \*現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。



↓↓↓

### 歩道に埋められたユダヤ人の記録を残すプレート@フライブルク

亡くなったユダヤ人の名前や移送された収容所名などが記されており、生前に暮らしていた場所に埋められています。



### シュトゥットホルツ強制収容所

一面雪に覆われていて、山奥のとても寒いところでした。





### ランスの街並み

道路の真ん中をトラムの線路が通っています。



### ランスのカテドラルのステンドグラス

本当に美しいです。



### ストラスブールの街並み

一気にドイツの建物っぽくなります。



### 欧州評議会

旅行では行けない貴重な経験でした。



### フライブルクの街並み

夜、お店の光で街並みがさらに綺麗になります。



### 丘からのフライブルクの景色

オレンジ色の街並みが一望できます。

# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月  
所属 & 学年 | 農学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

留学前にたてた目標として自分が農学部であることから、海外の農業がどのように行われているかということや、農作物の活用などについて知りたいというものがありました。特に、欧州の農業については授業でもあまり詳しく知る機会がなかったので、日本とどんな差があるのか調査しようと思いました。さらに、このプログラムに関連して日本酒の醸造体験に参加したことで、農業だけでなく日本と欧州の醸造法やお酒の違いについても調査したいと思うようになりました。Pommery シャンパン醸造所でのセラー見学ツアーでは、貯蔵されているボトルの本数やその巨大な設備もさることながら、内部の至るところに取り入れられた壁画やネオンなどのアート作品にも驚かされました。熟成段階ではボトルの底に澱がたまるのを防ぐためにボトルの向きを定期的に変える必要があり、その作業は近代機械化され、作業時間が非常に短縮されたというお話を頂きました。日本酒の醸造体験では、蒸した米を冷ますために急な階段を上り下りする必要があり、日本酒醸造にもより機械化が取り入れられれば作業が楽になるのではないだろうかと思いました。欧州ではその規模の大きさから機械化せざるを得ないという事情もあるのかもしれません。シャンパンの名産地であるランス市を訪れた際には、市役所や一般家庭の装飾にもブドウをモチーフにしたものがあり、お祝いごとの際にシャンパンを開けることが一般的であるなど、市民の方々が、自分たちの住む街やその土地の特産物を非常に愛していることを知ることができました。名古屋の農業資源や観光資源を活かし、名古屋市を PR していくにあたって、まずは名古屋に住む人々に名古屋の魅力を知ってもらうことが観光都市としての名をあげることに繋がると感じました。

農業面において、事前にデータでフランスの農地面積が日本よりも非常に広いことは知っていたのですが、延々と広がる広大な畑を実際に見ることでそれを実感することができました。冬だったため作物を育てている様子を見ることはできなかったものの、車で少し走るだけの距離にそのような畑があり、時期になればワインの原料であるブドウや、ビールの原料のホップなどが作られるとのことでした。

それに加え、自分が生物選択だったこともあり、どんな生物がどのように暮らしているのか、欧州の自然環境やそこにある生態系を見ることができればと思っていました。ドイツ、フランスを通して街路樹が日本より大きく、トラムの線路には緑化されている箇所もあり、街で暮らしながらも様々な場所で緑を目にすることができました。自然の環境が保たれているおかげか、野生のリスを見かけることもありました。人が暮らす街のすぐ近くでも、生態系が維持できているのは自然があふれている証拠だと思います。

今回海外で調査を行うにあたり、日本との差を知るために日本や名古屋市のことについて調べる機会が多くありました。その結果として、これまで知らなかった地元の取り組みや良い点を知ることができ、欧州だけでなく名古屋についても発見が多くありました。加えて、農学部でつく

っている日本酒や、名古屋のブドウで行われるワイン醸造についても調べたことにより、自分の専門分野にも改めてより深い興味をもつことができたと思います。上で述べた環境への意識など欧州の優れている点を多く目にすることができた一方で、逆に落ちているゴミの少なさなど日本の良い所に気づけるようになったこともこの調査で得たものだと感じました。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

するかしないか迷っているようであれば、絶対に経験しておいた方が良いと思います。留学は非常に大きな経験値となりますし、経験値が増えて損になることはまずありません。海外に行ったことがなくスーツケースも長期滞在に必要な荷物も何もない、というのが懸念材料の一つでしたが、スーツケースやWi-Fi、変圧器はレンタルすることができますし、大抵の細々したものは百均でそろいます。海外旅行好きの親戚や友人がいればその人に借りるのも一つの手です。私自身1年生の頃は自分が留学するとは夢にも思っていませんでした。今は行ってよかったと思います。

## 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	15万円	
海外旅行保険	2万円	スーツケースが帰国時に破損していましたが、航空会社に依頼したため保険は一度も使いませんでした。
研修費（授業料・宿泊代等）	8万円	
食費	2万円	基本的に日本のようにレジでフォークやスプーンは渡してくれません。現地で購入すると大容量なのでプラスチックのフォークなどがあると便利かと。
交通費	1万円	ほとんどの移動はトラムで事足ります。トラムのチケットはグループ割のようなものがあるので、グループで買うとお得です。長距離移動で電車に乗るときは、券売機がよくわからなければ窓口で買ったほうが的確により安いものを買えます。
その他（小遣い、通信費など）	5万円	お土産を買うときは、誰にいくらかの物を渡すか（できればどのような物かまで決めて）リストを作っておくとよいと思います。たくさん買ったつもりでも買い忘れがありました。持って行く金額の参考にもなります。
<b>計</b>	<b>35万円</b>	

自由記述欄 \* 現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓

フランスでは英語が通じないという噂をよく聞くので、フランス語のわからない私は内心不安でした。実際、あなたフランス語話せないの？という空気を感じることはままありましたが、ほとんどの場合英語でやりとりをすることができました。相手が英語を話さない方だったときには、ひたすら英単語で自分の要求を伝え続け無事に(?) 買い物ができました。言葉がわからずともニュアンスで言いたいことはなんとなく伝わりますし、店でのやりとりはだいたいワンパターンなので、何回か買い物をしているうちに流れがわかってきます。本当に困ったときには、スマホで翻訳した文章を見せれば理解してもらえます。指さし会話ができる本があると非常に

便利だと感じました。これに対して、ドイツでは十中八九英語が通じ、こちらの不慣れな様子が伝わったのか最初から英語で話してもらえる場合も多く、個人的にフランス英語よりも耳になじむので言語面ではとても楽でした。もちろんフランスでも流暢に英語を話す方もいますし、観光客のよく来る店では多言語での案内もされていました。ですが、やはりその土地の言語がわかるとより楽しめると思います。これまでは英語さえできればどこでも生きていけないかと思っていましたが、より深い交流のために現地の言葉を学ぶ大切さを知ることができました。ストラズブルにあった観光客に人気のパンデピスというお店では、店員さんに日本人であることを話すと日本語の商品案内をもらうことができました。こちらのお店で買ったレモンピールはとてもおいしく、それ以外の商品も非常においしそうでした。それ以外では、ドイツのフライブルク大聖堂のすぐそばにある蜂蜜屋さんがおすすめです。蜂蜜だけでなく蜂蜜を使ったお菓子も多く置いてありました。クグロフの形をしたトリュフチョコレートがおいしいと聞いていたので、人に渡す用に買いカバンに入れて持ち帰ったのですが、寮に戻ると見事に溶け一部原型をとどめていませんでした。この研修中は非常に寒く、かなり分厚いコートの前を閉めた内側に肩掛けカバンを入れ込んでしまっていたのが原因でした。これだけ寒ければ問題ないだろうと高をくくっていたのですが、コートの保温力は思った以上でした。当然人に差し上げることなどできず自分で食べたところ、今まで食べたトリュフチョコレートの中で一二を争う美味しさだったので結果オーライです。買い物だけでなくカフェでケーキもたくさん食べました。どこで食べたケーキも美味しく、甘い物には外れがありませんでした。夜ご飯がケーキの日もありひたすら甘い物を食べる毎日でした。もちろんレストランの料理も美味しい物ばかりです。ただしどれもサイズが大きく量が多いので胃袋を広げてから行った方が吉です。そのおかげで帰国後食欲が止まらず大変な思いをしますので諸刃の剣ではあります。下はケーキコレクションです。



余談として、話はまったく変わりますが動物好きの人にはストラズブルにある動物学博物館がオススメです。ひたすら動物の剥製や虫の標本が並び、大学キャンパス内とは思えない規模です。

# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月  
所属 & 学年 | 文学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

①

今までほとんど海外に行ったことがなく、特にヨーロッパには一度も行ったことがなかった。そのような中で海外の文化や価値観などにほとんど目を向けることがなく日本人としての価値観や考え方こそが正しいと思って生きてきた。そこで、今回は初めて行くヨーロッパという環境の中で積極的に自分から行動して様々な自分とは違った価値観や文化などを柔軟に取り入れることを目標とした。

②

初めのうちは恥ずかしさもあり、なかなか話しかけることができなかったが徐々に様々な人に自分から話しかけられるようになった。留学生の歓迎パーティーでは、様々な国の人に話しかけ、考え方の違いを感じさせられた。また、他の人とは違った様々な場所に出かけ、地域による違いも感じる事ができた。

③

研修を通して、自分の考えが世界におけるスタンダードではないということを強く感じ、様々な価値観を理解できるように努力しなければならないと強く感じた。また語学力もしっかりとしたコミュニケーションをとるためには必要であると感じた。外国人と交流できる機会を積極的に活用していきたいと思う。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

長い期間の留学に行った方が語学力は付くと思うが、たとえ今回のような短い研修でも言葉の面以外でも日本にいただけでは決して学べないことを多く学べると思うので、なかなか長期で行くのが難しい人でも学校の長期休暇などを使って短期のものに挑戦してほしい。

## 3. 研修費用 (さしつかえなければおおよその金額を教えてください)

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	①円	①+②で約240000
海外旅行保険	20280円	
研修費 (授業料・宿泊代等)	②円	
食費	50000円	
交通費	30000円	いろんなところに行ったので他の人よりも高いと思う
その他 (小遣い、通信費など)	40000円	w i f i 1万円
<b>計</b>		<b>38万円</b>

自由記述欄 \*現地のおすすめ情報や留学エピソードなどご自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。



↓↓↓

ドイツのシュツットガルトにブンデスリーガの試合を見に行った。滅多にできない経験であるし周りの人のテンションが異常に高くて楽しかった。まず日本では経験できない。周りの人のノリもよかったです話しかけてもらったり助けてもらえた。



FWの時間に行ったバーゼルとハイデルベルクの写真。電車を調べたりバスの予約をするのが大変だったがアクティブに様々な場所に行けて良かった。ハイデルベルクは景観もよくお土産屋がたくさんありとても楽しかった。海外でチケットを取ったり行きたい場所を調べるのはいい経験になったしせっかくスマホが使えるので積極的に自分のしたいことや行きたい場所に行く方が絶対楽しくなると思うし学べるものも多くなると思う。丸一日フリーの日が一回くらいあっても良かったと思う。

# 海外研修報告書

記入 | 2018年 3月

所属&学年 | 経済学部 2年生

留学先大学 (国名)	ランス大学 (フランス)、フライブルク大学 (ドイツ)
短期研修のプログラム名	欧州における文化・海外研修
留学した期間	2018年2月18日~3月4日

## 1. 報告事項

私が履修を決めたときに掲げた目標は2つあり、1つ目は海外の文化を学び、受け入れ、実践することです。今回、語学留学ではなく、この研修にしたのは外国の文化、習慣、歴史などの日本との違いに興味があり、それを肌で感じたかったからです。実際に行ってみると、想像していなかったたくさんの発見があり、毎日がとても新鮮で驚きの連続でした。例えば、お店に入るときと出るとき、寮の中ですれ違うとき、道ばたで目が合ったときなどたくさんの場面で挨拶をしていたり、どんなレストランやカフェに行ってもテーブル会計であったりして初めは驚きましたが徐々に慣れ、受け入れることができました。公共交通機関の利用の仕方も日本とは違って改札がなかったり、事前にインターネットで切符を買うことができたりして、一歩間違えると罰金を払わなければならないことにもなりかねなかったので初めは不安がありましたが、無事に利用することができて少し自信ができました。また、現地の方々が話しているときにしっかりと頷いたり反応したりしないと、「大丈夫？分かってる？」と聞かれることもあったので聞く側の姿勢の違いも感じましたが、しっかりと反応することで理解を深めることもできて良かったです。

2つ目の目標は人任せにせず、自ら行動することです。私は普段の生活で友達と旅行などに行くときも友達に頼ってしまうことが多く、海外で自ら調べ、行動することによって自主性を高めたいと思いました。フィールドワークの時はインターネットでの電車の事前予約から戸惑いましたが、電車の方面、乗り換えの駅、時間などを細かく調べていったおかげで多少のトラブルはあったものの、なんとか無事に帰ることができたので自信になりました。後で考えてみるともっと積極的になれたのではないかと思う場面がいくつもありましたが、この2週間で積極的になることの大切さや積極的になることで得るもの大きさを感ずることができたので、これから積極的に様々なことに挑戦していきたいと思います。

この研修を通して自ら計画を立て、それを実行することに自信がつき、また外国語でコミュニケーションを取ることに抵抗が少なくなりました。初めはパン1つを買うのでさえ少し緊張してしまっていたのですが、最後は何の抵抗もなく注文して買うことができるようになりました。また、留学生ウェルカムパーティーでは最初はなかなか話しかけられませんが最後には一緒に踊ったりSNSを交換できるまでになりました。このようになれたのは完璧な英語ではなくても、ジェスチャーや表情、単語で相手に伝えることが分かったからだと思います。しかし、やはり今の英語力では伝えたいことが伝えきれなかったり、質問がしづらかったりしたので、英語の勉強も頑張っていきたいと思いました。

## 2. 留学を考えている学生へのメッセージ

海外に行くと、全く想像していなかった文化、習慣、街や雰囲気などを感じることができ、視野が広がります。インターネットで様々な情報が手に入れますが、実際に自分の目や耳を使

って感じた驚きや感動はとても大きいです。この研修に参加したおかげでたくさんの頑張りたいことを見つけ、これからもどんどん海外に行きたいと思うようになりました。留学することをすぐにはなかなか踏み切れないと思いますが、本当にたくさんの良い経験ができ、得るものが多いと思うので少しでも興味があるなら絶対に留学に行くべきだと思います。

### 3. 研修費用（さしつかえなければおおよその金額を教えてください）

内訳	おおよその額	備考・お金に関して工夫したことや注意点
航空運賃&ビザ申請料	15万円?	
海外旅行保険	1万5千円	
研修費（授業料・宿泊代等）	6万円くらい?	
食費	1万5千円	
交通費	3万円	
その他（小遣い、通信費など）	5万円	
<b>計</b>	<b>約31.5</b>	<b>万円(奨学金でもう少し安くなります)</b>

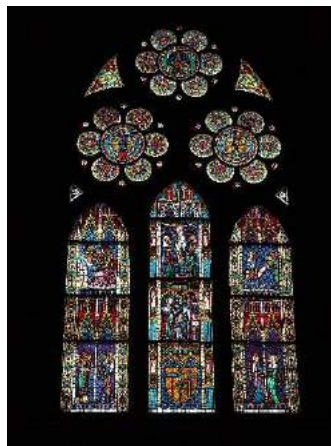
自由記述欄 \*現地のおすすめ情報や留学エピソードなど自由にご利用ください。写真添付なども歓迎します。

↓↓↓



↑コルマル

アルザス地方はかわいい街並みが多かったです。



←フライブルクの教会のステンドグラス

ステンドグラスはその地方に関わる物や出来事をモチーフにしていることも多く、とてもきれいでした。



←ランス大聖堂  
夜はライトアップされていてとてもきれいでした。



↑時々変な日本語もありました。私は多言語化について調査していましたが、フランスではフランス語のみの場所も多かったです。